

2001年度

NGO-JICA相互研 参

評価は誰のため？何のため？

報告書



主催

特定非営利活動法人

国際協力事業団

国際協力NGOセンター

JICA

JANIC

総 研
J R
01-34

報告書の発刊にあたって

平成13年10月11日から13日まで3日間にわたって、(特活)国際協力 NGO センター (JANIC) と国際協力事業団 (JICA) は共同で「NGO-JICA 相互研修」を開催しました。この研修は、NGO 諸団体と ODA、なかでも JICA との連携への気運が高まりつつあった平成 10 年度から開始され、今年で4回目の開催となりました。

地球上ではいまだに数多くの開発途上国が、貧困・人口・環境などの分野で未解決の課題を抱えております。我が国も、先進国の一員として、これら課題を含めた様々な問題の改善に積極的に取り組んでいく義務があります。しかし、これら貧困・人口・環境などは、決して一部の国家間の問題ではなく、地球全体として問題に取り組んでこそ解決の糸口が見えるものです。国際協力事業団 (JICA) もその一役を担うべく、努力を重ねておりますが、JICA のみ、あるいは政府のみで対応できる問題ではありません。直接住民に働きかける草の根活動や、きめ細かい対応など、我が国の責任を果たしていく上で NGO の活動は欠かすことはできません。このことは世界ではもはや常識とされ、ユニセフや世界銀行等においても NGO とのパートナーシップが推進されています。JICA にとっても今後途上国援助を行う上で JICA が NGO との連携を図っていくことは必要不可欠なものです。今回の NGO-JICA 相互研修は、NGO、JICA 双方にとって、この流れの中での確実な一歩となったのではないのでしょうか。

昨年及び一昨年は NGO-JICA 相互研修では参加型開発を研修のテーマとしてきました。しかし、効果的、かつスムーズな研修運営には評価というプロセスも欠かせません。NGO、JICA 双方ともにこのホットイシューへの関心は強く今年度の NGO-JICA 相互研修のテーマとなりました。研修では NGO 諸団体職員と、JICA 職員が4つのグループに分かれ、白熱した議論の末、プロジェクト事例に対する「プロジェクト評価計画」を作成しました。それらを各グループが発表した上で、総括として、「望ましい評価ガイドライン」を作成するに至りました。「評価」という NGO、JICA 双方の意見が如実に現れるテーマだけに、相互理解が大いに促進されたと確信しております。また、この研修を通じ築かれた NGO、JICA 間の人的ネットワークこそは今後の確固たる礎になるに違いありません。今回の研修及び、本報告書が今後の NGO、JICA の連携、あるいは「評価」への考察に少しでも役に立つこと心から願います。

最後に、研修の開催にあたってご協力いただいた (特活) 国際協力 NGO センター、半年に渡り実施準備にご尽力いただいたコースリーダーの女子栄養大学磯田厚子教授をはじめとする検討委員の方々、研修当日の事例報告や講演等にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

国際協力事業団
国際協力総合研修所
所長 加藤圭一



1168870[2]

あ い さ つ

2001 年度「NGO-JICA 相互研修」(第4回)を終え、研修を修了した方たちのアンケート結果を拝見しますと、本研修を評価する声が多いことに共催団体としましては、大変嬉しく存じます。本研修を過去4回、実施してまいりましたが、当初の目的は着実に実現されつつあるようです。すなわち、(1) 国際協力を実施する上でのパートナーとしての NGO と JICA 双方についての理解促進と、国際協力に関する認識を共有すること。(2) 将来の連携に向けた人的ネットワークの形成と情報交換の場を提供すること。(3) NGO および JICA 双方の若手および中堅職員の人材育成に寄与すること。

現在、外務省には、外務大臣の諮問委員会としての「第2次 ODA 改革懇談会」が設置され、提言をまとめる作業が続けられていますが、提言作成の基本に流れる考えは「国民参加」です。去る8月に出された「中間報告」には、ODA への国民参加について次のように記述されています。「ODA は、日本という国の在り方、国際社会における日本人の生き方に係わる問題である。そうであれば、政府のみならず国民各層による ODA 活動への幅広い参画、参画主体相互の連携が不可欠である。個人、NGO (非政府組織)、企業、大学、研究組織、地方自治体などがそれぞれの比較優位を活かし、国民各層が主体性をもって ODA に取り組むべきである。」私たちが実施している「NGO-JICA 相互研修」は、必ずしも、NGO が ODA 活動に参画することを目的として行われているわけではありませんが、本研修を通して、JICA の研修生の多くの方たちが、NGO による国際協力に係わる姿勢や考え方そして活動の実態(今回は「事業の評価」がテーマ)を学習され、少なからず、影響を受けられていることです。一方、NGO から参加した研修生の間にも、JICA の事業についての理解が深まり、JICA 職員の方々との相互学習から多くを学び、信頼関係を築かれつつあることです。さらには、NGO ・ JICA 研修生の間それぞれの違いを認めながら両者の協働関係への積極的なイメージが生まれつつあることです。私たちの研修は、まだささやかなものであるかもしれませんが、日本の ODA が真に「国民参加」に移行しつつある過程の意義ある第一歩として自負しています。

さいごに、今回の研修を実施するにあたり、幾度も会合を重ね、研修プログラムの準備をしていただいたコースリーダー、検討委員の方々、研修で貴重な事例報告そして講義をしていただいたの方々、また、研修を盛り上げるためファシリテートしていただいた方にこころよりお礼申し上げます。

2001 年 12 月

(特活)国際協力 NGO センター

常務理事 伊藤道雄

平成13年度NGO-JICA相互研修関係者リスト
 コースリーダー・検討委員・事例報告者・講師・事務局

コースリーダー	磯田 厚子	女子栄養大学/特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター	助教授/副代表
検討委員	赤石 和則	東和大学	国際教育研究所教授
検討委員	枝木 美香	アユス=仏教国際協力ネットワーク	事務局
検討委員	米山 敏裕	特定非営利活動法人 地球の友と歩 む会	事務局次長
検討委員	長畑 誠	シャプラニール=市民による海外協 力の会	海外事業課課長
検討委員	大川 直人	JICA企画・評価部	評価管理室室長代理
検討委員	神崎 義雄	JICAアジア第一部	計画課課長代理
検討委員	竹内 康人	JICA農業開発協力部	農業技術協力課課長代理
検討委員	小嶋 雅彦	JICA青年海外協力隊事務局	管理課課長代理
事例報告者	田中 博	特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全 協会	事務局長
事例報告者	藤井 智	JICA農業開発協力部	農業技術協力課課長代理
講師	源 由理子	開発援助コンサルタント	
講師	池住 義憲	国際民衆保健協議会	日本連絡事務所代表
講師	長澤 一秀	JICA企画・評価部	評価監理室調査役
事務局 (NGO)	伊藤 道雄	特定非営利活動法人 国際協力NGO センター	事務局長
事務局 (NGO)	友澤 享子	特定非営利活動法人 国際協力NGO センター	総務担当
事務局 (JICA)	西野 恭子	JICA国内事業部	国内連携促進課課長代理
事務局 (JICA)	斉藤 祐巳	JICA国際協力総合研修所	人材養成課課長
事務局 (JICA)	橋本 忠夫	JICA国際協力総合研修所	人材養成課課長代理
事務局 (JICA)	西井 洋介	JICA国際協力総合研修所	人材養成課
事務局 (IHCSA)	大塚 洋子	社団法人 国際交流サービス協会	派遣研修部長
事務局 (IHCSA)	磯 智明	社団法人 国際交流サービス協会	派遣研修部研修課課長
事務局 (IHCSA)	松田 俊紀	社団法人 国際交流サービス協会	派遣研修部研修課

NGO-JICA相互研修実施準備スケジュール

- 4月12日 第1回検討委員会（研修の基本方向性、研修テーマ、対象者、実施期間）
- 5月 1日 第2回検討委員会（研修テーマ、参加者資格要件、研修の流れ、研修日程）
- 6月 1日 *募集開始（募集要項配付、ホームページ等への掲載）
- 6月11日 第3回検討委員会（講演内容・相互訪問・全体会内容検討、講演者決定、事例候補検討）
- 6月30日 *募集締めきり
- 7月24日 第4回検討委員会（受講者決定、事例紹介方法検討、分科会内容検討、全体会内容検討）
- 8月 3日 講演者との打ち合わせ（講演内容の確認）
- 9月17日 第5回検討委員会（グループ分け決定、事例紹介用資料の検討、全体会の流れ検討、分科会ファシリテーター決定、オブザーバー参加の検討）
- 10月11日～13日 相互研修実施

目 次

1.研修総括

- (1) 研修の成果について 1
- (2) 研修概要 4
 - ・研修構成概要
 - ・日程
 - ・参加者リスト
- (3) 終了時アンケート結果 9

2.研修内容

- (1) 事務所相互訪問 21
 - ・全体概要
 - ・NGO 事務所訪問概要 (JANIC,JVC,LIFE)
 - ・JICA 本部訪問概要
- (2) 講演 27
 - 「評価とは何か」
- (3) 分科会 45
- (4) 全体会Ⅰ 47
 - ・分科会報告
 - ・報告時使用資料
- (5) 全体会Ⅱ 76
 - ・「望ましい評価ガイドラインの作成」
- (7) 全体総括 79
 - ・磯田コーディネーター総括

付 録

- 付録1 プロジェクト紹介資料
- 付録2 募集要項

1. 研修総括

研修の成果について

NGO-JICA 相互研修コースリーダー

女子栄養大学助教授・日本国際ボランティアセンター福代表 磯田厚子

1. 研修の目的と内容

今年で4回目となった「NGO-JICA相互研修」は、過去3年間に主目的としてきた「相互理解」を基本的に踏襲しつつも、もう一步踏み込んで、国際協力の具体的な方法論を批判的に議論することをめざし、シミュレーションによるワークショップを行った。

具体的なテーマとしたのは「現実の案件事例をもとに評価計画を作る」である。

今年は特に以下の点を盛り込み、より成果の上がる充実した研修となるよう工夫した。

- 1) 現実の事業案件を対象として、評価計画立案というシミュレーションを行うことで、単なる比較検討というより、より深い議論を目指した。
- 2) NGO, JICA共通に原則とすべき「評価ガイドライン」を作成し、まとめとした。
- 3) 全員参加での事務所相互訪問（昨年より）の後に、初日も全員宿泊とし、相互の経験交換、人的交流の機会とした。

2. 成果

1) NGO・JICAの同違点についてのより具体的な相互理解

主目的としている相互理解であるが、例年通り、今年もかなりの理解がされたと考える。評価計画を立てるために、事業自体が誰のための何を目的としたものなのか、そのために実施したことは何で、今の所どんな成果が出ているのか、を理解すること無しには、出来ないことが、どの分科会でも強く認識されたようである。そのため分科会の多くに時間を割いて「どんなプロジェクトだったのか」を深く議論していた。

今回は、事業自体を比較検討する内容ではなかったが、むしろこの議論を通して、NGOとJICAそれぞれが目指すことやアプローチに大きな違いがあることを、相互によく再認識したようである。具体的には、NGO事業が、期限や目標は曖昧であるものの、プロセスの中で柔軟に意味ある活動に絞り込んで取り組んで成果をあげていることや、JICA事業は住民裨益という点では具体的なアプローチやその成果はなかなかあげられていないものの、目標設定には住民も視野に入れて取り組んでいること、などのほか、多くの面から理解された。

2) 評価立案のノウハウに関する学び

初日夜のパネルディスカッションで、各パネリストから「評価」の基本に関する挑戦的な発題があったことで、研修生にも大きな刺激となったようである。とかく、評価項目や手法に関心が行きがちのところを、「そもそも評価とは何のためにするのか」「誰のための評価か」「評価

を何にどう生かすか」を良く考えることなしに、意味ある評価計画は作れないことを良く理解した。

同時に、前述の通り、事業自体を良く理解し、かつその事業が根源では何を目指していたのかを明確にすることなしに、評価計画は立てられないことを学んだことも、大きな成果であったと考える。

また、単なる成果を図るためばかりでなく、評価からどれだけ学び、どう変えられるか、次に生かすことの大事さを議論した。評価をラーニングプロセスとして捉えることが大きく認識された。

3) 望ましい評価のガイドライン

短い時間の中での小グループによる討議の結果を集約しただけであるので、必ずしも十分練れてはいないが、評価者として、さらにあえて言えば国際協力に携わる者として、視野に入れなければならないと思われる種々の考慮事項に関し、広くカバーした提言は出来たのではないかと考える。

大きな項立てには「全過程を通して考慮せねばいけない事」「ラーニングプロセスとして考慮せねばならない事」などがあげられ、プロジェクトサイクルの一貫としての評価の位置付けを明確に認識することを提起した。

更に、いわゆる定量的把握だけでなく質的把握の大事さ、目に見えない事柄を把握する大事さも議論された。JICAならびにNGOそれぞれが特に気をつけるべき点にも言及された。5項目評価などNGOとしても参考になる点はあるつつも、それだけに入らない部分に関する評価の大事さも指摘された。

3. 今後の課題

参加者からのコメントでも、大変効果が上げられたようであり、是非とも今後も継続することを望むものである。1回の参加者が双方各15名前後という小人数であるが、小グループでの分科会によるワークショップという形態であるからこそあげられている成果であると考え。相互理解にはそれこそ顔の見える関係が不可欠である。従って、1年間で研修でき、相互に理解し合う人々の輪を、更に拡大する必要があるだろう。それを通して、はじめて有機的なNGOとODAの連携が実現できるものと考え。

そこで、来年以降の本研修に関する課題を以下に述べたい。

1) 参加者へのフォローアップ

せっかく出来た参加者の相互の関係を、何らかの継続的なネットワークに出来ないだろうか。昨年の参加者からも同様な声が出たが、今年にもまだ生かせていない。今年の参加者は、その後自主的に、NGO創設者を囲む懇談会を開催し、研修案件の裏話などをさらに議論したようである。本研修事務局が企画するものではないかもしれないが、共に2泊3日して忌憚のない

意見交換を行った共に国際協力に志を持つ仲間としての共に何かを行う何らかの仕組みづくりが出来るとよいと考える。

2) 互いのスキームや協力活動への組織的フィードバック

参加者は、研修を通して、それぞれの組織、あるいは共通して抱える克服すべき課題をより明確に認識するようになる。しかし、残念ながら参加者個人の反省や認識に留まるものである。研修事業という性格上の限界でもある。しかし、本来はそれぞれ個人への力量アップを通じて、JICAやNGO界全体としての質的向上に寄与することを長期的には狙っているものであろう。

おそらく各参加者は、各人の担当業務に生かしたり仲間たちとの共有は試みるだろうと予想される。しかし、1スタッフとして生かせる限界があろう。研修を企画実施したのものとして、それを支える仕組み考えられないだろうか。これも前記とつなげる形で考えることも可能であらう。

4. 最後に

本研修は、多くの方々によって支えられて実現できた。

まずは、パネリストの方々は、お忙しい時間を割いて、それぞれ異なる視点からの刺激的な評価の考え方を提示して下さった。参加者は最後までそこでの発題の意味をきちんとかみしめて議論していた。大変大きな影響を与えていただいたと感謝している。

また、検討のための事例を提供下さった方々にも感謝したい。双方の事例がある意味ではそれぞれの典型的なタイプの事業であり、比較しながら議論する上で実に適切であった。また、それぞれの特徴をきちんと伝えてくださるプレゼンテーションをして下さったことが、議論を深めることにつながったと感謝している。

今回、過去3回から変えて、評価をテーマに選んだが、前にも述べたが、かえって双方の事業を丁寧に検討する機会となり、相違点や課題議論することに繋がった。また研修生の中には現場経験の殆どない方々もかなりいらっしゃるが、その方々にとっても、評価についてであれば当事者として議論に参加できたようである。例年以上に分科会での議論が活発であったことも付記しておきたい。

最後に、本研修のもともとの趣旨は、NGOとJICAの連携を模索することにあるが、これまで4回の本研修による経験から、安易な連携ではなく、双方の特徴をきちんと見据えたより有意義な連携を模索すべきことが見えてきている。事例の検討や本研修から見えてきているのは、双方の長所短所がまだまだ克服でききる可能性をもつものであり、そう望んでいる若いスタッフが沢山いるということである。相互に克服し、より良い国際協力を目指す上での、良きライバルとしての連携が最も価値ある連携かもしれない。そのためのネットワークが本研修を通して作られつつあることが、最大の成果であらうと信じている。

以上

研修の概要

1. 研修の目的

- (1) 国際協力を実施する上でのパートナーとしてのNGOとJICA双方についての理解促進と、国際協力に関する認識を共有すること。
- (2) 将来の連携に向けた人的ネットワークの形成と情報交換の場を提供すること。
- (3) 上記(1)、(2)を通じ、NGO及びJICA双方の若手及び中堅職員の人材育成に寄与すること。

2. 研修テーマ

NGO、JICAそれぞれの具体的なプロジェクトを研修材料として取り上げ、プロジェクトに対する評価計画の作成演習や議論を行い、「評価は誰のため？何のため？」というテーマに対しNGO、JICA双方の経験とノウハウを持ち寄っての相互学習を行います。具体的な成果としては、研修プログラム最後の全体会でそれまでの分科会等での議論の結果を集約して「望ましい評価のガイドライン」を参加者全員で作成することを目標とします。

今回研修材料として取り上げるプロジェクトは、NGO側の案件として「ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト」、JICA側の案件として「フィリピン・ボホール総合農業振興計画」の両案件です。参加者の皆さんを4グループに分けた分科会では、それぞれどちらかの案件を取り上げ評価計画の作成等を行います。

3. 主催

国際協力事業団 (JICA) (特定非営利活動法人) 国際協力NGOセンタ (JANIC)

4. 研修期間

2001年10月11日 (木) から10月13日 (土)

*2泊3日の泊まり込み形式での研修となります。

*10月13日 (土) は17:00頃終了予定です。

5. 研修場所、宿泊場所

国際協力事業団 国際協力総合研修所 (所在地：東京都新宿区市谷本村町10-5)

6. 研修経費

研修にかかる経費 (教材費、国際協力総合研修所での宿泊費など) はすべて国際協力事業団が負担します。研修参加に要する交通費は、東京近郊以外に居住する方についてのみ事業団の規定により支給します。

7. 参加証明書

主催者より、研修全日程を修了された方に、参加証明書を交付します。

8. 研修実施体制

- (1) コースリーダーのもとにNGO諸団体及び国際協力事業団双方の代表によって構成される検討委員会を設置し、研修内容、実施運営について協議し、決定します。
- (2) 国際協力総合研修所人材養成課及び国際協力NGOセンターに事務局をおき、研修実施にあたっては、業務の一部を（社）国際交流サービス協会に委託し実施します。

2001年度 NGO-JICA 相互研修日程表

10月11日 (木)

時間	NGOスタッフ	JICAスタッフ
13:15	集合、受付 事務所相互訪問 (JICA本部 11AB)	集合、受付 事務所相互訪問 (国際協力NGOセンター 5階会議室)
13:30~ 14:20	企画・評価部 (JICAの改革、評価のねらい等について)	NGOのプロジェクト運営・支援体制と国際協力活動の現状
14:30~ 15:10	国内事業部 (国内でのNGOとの連携プロジェクト、今後のJICAとNGOの関わりについて)	各事務所へ移動
15:20~ 16:30	各地域部・プロ技事業部 (3グループ程度に分かれての職員との交流)	日本国際ボランティアセンター(JVC) 又は 地球の友と歩む会 (LIFE)
	JICA国際協力総合研修所へ移動	

17:40~ 17:50	開会 (主催者挨拶) 国際協力NGOセンター、国際協力総合研修所	国際会議場
17:50~ 18:20	アイスブレイキング	
18:20~ 18:30	オリエンテーション	
18:30~ 21:00	講演・パネル討議「評価とはなにか」	
	～全員宿泊～	

10月12日 (金)

9:15	集合	
9:20~ 9:30	事務連絡	国際会議場
9:30~ 10:25	事例紹介1及び事例分析 「ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト」 (NGO案件)	国際会議場
10:35~ 11:30	事例紹介2及び事例分析 「フィリピン・ボホール総合農業振興計画」 (JICA案件)	国際会議場
11:40~ 12:30	事例分析 (NGO、JICA双方の事例紹介を踏まえて)	国際会議場
14:00~ 17:00	ワークショップI (4グループに分かれて、事例を題材にした評価計画作成等)	201A・B 202A・B
17:00~ 19:00	意見交換会	400
19:00~ 21:00	ワークショップII (ディスカッション、全体会での発表準備)	201A・B 202A・B
	～全員宿泊～	

10月13日 (土)

9:30~ 12:30	全体会I (分科会の結果報告)	国際会議場
13:30~ 16:30	全体会II (小グループに分かれての「望ましい評価ガイドライン」の作成、各グループの発表及び全体総括)	
16:30~ 17:00	閉会 (主催者挨拶、アンケート記入など)	
	～解散～	

2001年度 NGO-JICA 相互研修日程表

講師・ファシリテーター一覧

○講師

10月11日(木) (NGOスタッフ)

項目	所属・氏名
JICA企画・評価部 (JICAの改革、評価のねらい等について)	企画・評価部企画課課長代理 三角幸子 企画・評価部評価監理室調査役 長澤一秀
JICA国内事業部 (国内でのNGOとの連携プロジェクト、今後のJICAとNGOの関わりについて)	国内事業部国内連携促進課 課長代理 西野恭子
各地域部・プロ技事業部 (3グループ程度に分かれての職員との交流)	各地域部及びプロジェクト方式技術協力担当事業部若手職員6名

(JICAスタッフ)

項目	所属・氏名
NGOのプロジェクト運営・支援体制と国際協力活動の現状	国際協力NGOセンター 山崎唯司
NGO事務所訪問	日本国際ボランティアセンター (JVC) 事務局長 谷山博史 地球の友と歩む会 (LIFE) 事務局次長 米山敏裕

項目	所属・氏名
主催者挨拶	国際協力NGOセンター 事務局長 伊藤道雄 国際協力総合研修所 次長 村田晃
アイスブレイキング	地球の友と歩む会 (LIFE) 事務局次長 米山敏裕
講演・パネル討議	開発援助コンサルタント 源由理子 国際民衆保健協議会 日本連絡事務所代表 池住義憲 JICA企画・評価部評価監理室調査役 長澤一秀

10月12日(金)

項目	所属・氏名
事例紹介1及び事例分析 ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト	ヒマラヤ保全協会 事務局長 田中博
事例報告2及び事例分析 フィリピン・ボホール総合農業振興計画	JICA農業開発協力部農業技術協力課 課長代理 藤井智

○全体進行・総括

日本国際ボランティアセンター副代表/女子栄養大学助教授 磯田厚子

○分科会ファシリテーター

シャプラニール=市民による海外協力の会 海外事業課長 永畑誠

アーユース=仏教国際協力ネットワーク 事務局 枝木美香

JICA 農業開発協力部農業技術協力課 課長代理 竹内康人

JICA 青年海外協力隊事務局管理課 課長代理 小嶋雅彦

○司会

JICA 国際協力総合研修所 人材養成課課長代理 橋本忠夫

NGO-JICA相互研修参加者リスト

No.	参加者氏名	所 属
1	青西 靖夫	日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
2	池間 哲郎	NGO沖縄アジア・チャイルド・サポート
3	石井 加奈子	国際協力事業団 中部国際センター
4	大石 常夫	特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン
5	大路 ゆかり	アジア女性自立プロジェクト
6	大竹 雅洋	国際協力事業団 農業開発協力部
7	岡村 美由規	国際協力事業団 中南米部
8	小栗 宏紀	日本口唇口蓋裂協会
9	後藤 裕子	特定非営利活動法人 難民を助ける会
10	小峰 雪代	国際協力事業団 調達部
11	佐伯 美苗	特定非営利活動法人 アムダ (AMDA)
12	澁谷 和朗	国際協力事業団 社会開発協力部
13	高見 早苗	山口ケニアを知る会
14	帖佐 理子	じゃっど (JADDO)
15	徳田 小矢子	国際協力事業団 国内事業部
16	中島 隆宏	財団法人 アジア保健研修財団
17	中野 恵美	特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター
18	西井 和裕	フィリピン情報センター・ナゴヤ
19	服部 浩昌	国際協力事業団 国際協力総合研修所
20	林 憲二	国際協力事業団 農林水産開発調査部
21	古澤 めい	草の根援助運動
22	星 光孝	国際協力事業団 国際緊急援助隊事務局
23	松尾 沢子	国際協力事業団 秘書室
24	馬淵 俊介	国際協力事業団 社会開発調査部
25	武藤 香織	特定非営利活動法人 地球の友と歩む会
26	室谷 龍太郎	国際協力事業団 国際協力総合研修所
27	森本 由布子	シェア=国際保健協力市民の会
28	山形 律子	国際協力事業団 アジア第一部
29	吉川 剛	社会福祉法人 基督教児童福祉会
30	吉田 憲	国際協力事業団 中南米部
31	渡辺 雅夫	国際協力事業団 筑波国際センター

NGO-JICA 相互研修アンケート集計結果

(参加者)

1. 研修に関してご自身で当初設定した目標を達成することが出来ましたか？

- 十分できた・・・・・・・・・・ 11名
- できた・・・・・・・・・・ 18名
- どちらともいえない・・・・ 1名
- あまりできなかった・・・・ 0名
- できなかった・・・・・・・・ 0名
- 回答なし・・・・・・・・・・ 1名

ご自身が得られたと思われる成果について具体的にご記入下さい。

- 評価のファクターを言える (might be)。
- プロジェクトの活動の分析を PDM を使ってやれるかもしれない。
- 評価のデザインを作れる (may be)。
- 他の NGO、JICA と顔見知りになった。
- COCONAT 体操。
- 若い JICA 職員の中に NGO マインドをもったポテンシャルをもった人達が多い。信頼に基づいたパートナーシップを築いた上で critical collaboration が出来ると思った。
- 設定した目標よりも「評価」という点について深く考えることができた。
- 評価することは大切でそれをどう活かしていくかがもっと大切。
- 評価する上で、そのプロジェクトを再検証すること“誰が何のために”というのがキーワード。
- JICA に対する認識がかわったのとよい関係ができた。
- 評価ということに対しどこから切り込むかヒントを得た。
- JICA、NGO の皆様と研修を共にして頂くことにより、これから学ぶべきことを見つけた。
- 情熱だけでは成り立たない。しっかりとした知識と理論が伴うことの重要性を認識しました。
- JICA と NGO との違いだけではなく、協働事業のイメージがつかめた。
- 評価の具体的手法を学ぶことができた。
- JICA の職員の方により近づくことができた。
- JICA の方々とお話できたこと：今までばらばらと担当者毎に連絡をとっていたので、なかなか見えにくい部分もありましたが、自分の組織について悩んでいること、これからの展望など共通する部分、差異の部分を知ることができました。
- やはり PDM に頼りすぎていたきらいがあったのでは・・・：今回の研修をうけて従来の評価方法を振り返ると PDM に拘り過ぎていたように思われました。もっと抜本的に考えなくてはという基本に気づかされた研修でした。

- 今までプロジェクトの評価を考えてのプロジェクト運営をあまり深く行ってこなかった事もあり、その考え方、手法を含めて大変勉強になり刺激を受けました。今後、この経験を活かし、担当しているプロジェクトについても実践していきたいと思います。また、JICAの方はもとより、他のNGO団体の方との交流も個人的にとっても楽しく過ごせたと思っています。
- そもそも評価は何のためなのか、誰のためなのか、見落としがちだが、最初に持つておくべき心構えを学ぶことができた。
- JICAとNGO各々の事業運営の良い点、伸ばすべき点を確認できた。
- 評価計画というものがイメージ出来た。
- 幾つかの重要なポイントに気がついた（評価において）。
 - 「誰が、何のために」という点をいつも心に留めておくこと。
 - 「目に見えないもの」の重要性。
- NGOとしての役割を再認識できた。
- 評価で使われるPDM手法について基本的な使い方、考え方について実習することができた。
- JICAの人々の中にもNGOマインド豊かな人達がいることがわかり、今後JICAがどう変わるか期待が持てるようになった。
- 自分たちの行っているプロジェクトを評価する差異の様々なヒント、視点を得ることができました。
- 評価計画の策定に文化人類学を専攻している者としてどのように関わられるかがワークショップの過程で少し見えてきたような気がします。
- 研修のテーマである「評価」について具体的、体験的に学んだ。
- JICA、NGOそれぞれの参加者のリソースや思いを受け止め、交流することができた。
- 他のNGOの方、JICAの方との意見交換会（ワークショップ中、及び外で）を通しての理解とネットワーク（継続して活かしていきたいです。）。
- 評価やプロジェクトに対する知識、情熱、意義、方法、整理、課題、新しい視点など再認識できました。
- これからの連携について一歩進んだ気がします。→大きな流れの中で活かしていきたいです。（個人の学びにとどまらないように）
- JICAにおける事業評価のガイドラインを学ぶことができた。
- 実際に事業評価を実施しているNGO団体の事例を知り、かつ、アドバイスを受けることができた。
- 参加型評価実施により期待される効果が具体的な事例の中から理解することができた。
- 普段NGOの方と接することがないため、これを機会に交流を図りたい。
- 「目に見えない評価という点について今後とも考えを深めたい。
- NGO、JICA職員双方の方々とゆっくり話ができた。
- 全員とは無理な話ですので、あと1泊あればよかったかと思いました。
- 参加者の様々な視点を得ることが出来た。
- JICA報告書（抜粋）は、数値的になりがちなのかもしれないということを再認識し、積極的に実績として出すべき点は、何らかの型で出せるようにした方が良かったと思った。
- これまでJICAの中での常識がNGOにとっての非常識である事を感じる事ができた。外部の視点を取り入れる必要を強く感じた。

- NGO のプロジェクトの理念、実施手法等を知ることができた。今後の連携に向け参考となった。
- NGO と JICA との共通点（目指しているもの）、相違点（規模、手段）などが理解できたこと。たくさんの NGO の方とお話できたこと、知り合えたこと。
- 評価をするにあたって、指標というものは既にあるものではなく、プロセスを振り返る中で形成されてくものであるということ。
- 目に見えない効果を評価することの重要さと困難さ。
- JICA、NGO 双方の活動を評価、分析したことで、JICA の援助とその評価の特徴を改めて理解できた。
- NGO から見た JICA 像、NGO の活動について知ることができた。
- NGO の方々の軽快なフットワークに感化された。
- 「評価」は様々あり、共通なものはないということを改めて感じたこと。
- 日々の業務の中で「誰のため、何のため」に事業を行っているのか見失いかけていたことに気づいた。
- NGO と JICA の違い、共通点について理解できた。
- 評価-特に Learning Process 型 Project-について、明解な答えは得られなかったが、今後考えを深めていく上での guiding light が得られた。また、一緒に議論してきた方々とネットワークが築けたことが最大の成果。
- NGO、JICA 双方のプロジェクトを並べて、NGO スタッフ、JICA スタッフが互いにコメントするという作業を通して、それぞれの視点、考え方の違いやプロジェクトのアプローチの違いを垣間見ることができ、非常に刺激になった。また、「評価」について基礎的なところから学ぶことができ、評価を行う際の重要なポイントを学ぶことができた。
- NGO の方々とのネットワークが広がった。
- JICA 内に同じ問題意識をもつ同志がたくさんいることを確認した。
- 参加者の間で国際協力にかける情熱を交換できた。
- あらためて評価のあり方について考えることができヒントをたくさん頂いた。
- 予想していたとおり NGO のプロジェクト評価にかかる考え方の違いはあり、それら（元々のプロジェクトが Process Learning 型でマトリクスがない etc.）の現状を直接きくことができた。
- 評価は一人ではなく、複数の視点を盛り込むことが必要。
- 一つのプロジェクトでも 5 項目評価の枠をとりはらうと違った評価になることがわかった。評価を行う際、PCM の 5 項目評価と、人の成長といった目に見えないものに対する評価の両方が必要である事がわかった。
- 数値化できないものをどう評価するか。その大切さがわかった。
- 開発調査に従事していた頃、あまり意識しなかった「評価」が、ODA のみならず NGO のプロジェクトにおいても hot issue であり、NGO 自らがその必要性を認識しているということがよくわかった。（JICA などに書類を出さねばならない、という理由で仕方なく評価に目を向けている・・・と思っていた）また、予想以上に JICA に対する「反発意識」が根強いことも実感した。そして、直接話せば容易に解消できる（こともある）ということがわかった。
- 参加型の意味とやり方を体感（体験）できました。初日のパネルディスカッションにて、検討委員からばかり質問が出たとき、高見さんが言った「主役はフロアであってフロアの

人が参加できるようにして欲しい。」という言葉が参加型のあり方についてハッと気づかせる発言でした。参加型で評価ヒアリングするとき、実施者がリードしすぎて参加者のことを忘れてしまうことがあるので、今後はその点に十分注意して、事務局、主催者はできる限り黒子に徹することが重要であることを心に留めて行動しようと思います。

—NGOの方々との議論から国際協力の基本姿勢“誰のために”“何のために”を再確認し、同時に現場の情熱を適格に多くの人に説明していく JICA 担当者の位置づけを知った。今後、具体的な業務改善へのヒント、例えば、JICA プロジェクトで不足がちなラーニングプロセスの文章化、明示化がえられたので、ますます取り組んでいきたい。また、NGOの方々は市民の一人でもあるので、日本の地方でもっと手を取り合い、学びあっていきたいと思った。

2. 研修中特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい。

- NGO、JICA 評価
- 全て
- ワークショップ (2)
- ワークショップの手法
- NGO-JICA 双方のケーススタディ、ワークショップ
- ワークショップによる評価計画の作成は、とても勉強になりました。
- ワークショップでのディスカッション (最も活発に意見を交換することができたため。)
- ワークショップ (グループ活動) → 意見をお互いに出しやすい → 全体会でも意見を出しやすくなる。
- 評価計画作成のワークショップ (3) —それぞれの知識、経験を持ち寄って作り上げていくプロセスのダイナミクスは非常に刺激的でした。
- ヒマラヤ保全プロジェクトの評価ワークショップ (時間はかかったが参加型で行ったことでプロセスを通し学ぶことができた。)
- 誰のための評価か、何のための評価かという視点でワークショップを行ったことが良かった。
- 小グループ単位でのワークショップでは、評価そのものについての意見交換にとどまらず、国際協力の本質や ODA、NGO の諸問題についても議論を深めることができた。
- JICA と NGO の相違点を理解でき、また、良さもわかった。
- 評価することの大切さ
- JICA 案件に評価のメスを入れるプロジェクト
- 演習が多かったことがよかったです。
- 議論を戦わせることができるくらいの実力をつけて、また、このような研修に参加したいと思います。
- ヒマラヤ保全協会さんのケースは非常に NGO 的で良い例を選ばれたと思う。
- 池住さんの話 (プレゼンテーション) (2)
- 4つのグループに分かれたディスカッションと発表

- グループに分かれての評価計画の作成 (2)
- 研修参加者とのコミュニケーション
- NGO の特質が目に見えないもの、定量的に捉えられないものを大切にすることを改めて確認できた。
- JICA 職員の中にも PDM 手法がオールマイティではないことを認識する人がいることがわかった。
- 様々な分野の人が参加していくこと (評価計画に限らず) の重要性を再認識しました。
- 参加者の議論への貢献がすごかった。ここから多くを学んだ。
- パネル討議→3 人の視点を伺って総合的にとても勉強になりました。新しい視点が開けました。
- 夜を徹して議論、発表の準備ができてよかったです。
- 合宿形式がよかったです。
- 初日、開講式前に JANIC、JVC に行ったこと。(3) この 2 訪問でやる気、気分が高まりました。
- NGO の事務所訪問は大変新鮮だった。
- 夜にお酒を気兼ねなく飲めた雰囲気もよかったです。
- facilitator の方がかなり引いた型で、参加者同士の話し合いを中心にされていたのは予定調和的でなく議論が出来たのでよかったです。
- JICA プロジェクトと NGO プロジェクトを比較することができ、共通点、相違点が明確化され良かったと思う。
- 「俺がやらなきゃ誰がやる」との意識が NGO には日常であるということ。
- JICA にはまだまだ「How much?」といったコスト意識が徹底されていないことを気づかされたこと。
- 事例分析の際の Discussion 発表が特に面白かった。
- 参加者の考えや経験が研修のリソースとなっている点
- 参加者全員のクリエイティビティ。日頃、フォーマットに沿って制約を意識しつつ仕事をしているが、たまにそれらを忘れ去って考えをめぐらすことも重要だと思った。また、夜中までも会議室を開放、議論の場をいただけただけことが良かった。
- プログラムとしては、最終日の GL 作りが、それまでの議論を整理できてよかったです。
- 必ずしも NGO の活動は行き当たりばったりではないということ。なるべくして波及、又は案件が追加されていることを知った。しかし、それをきちんと説明できるようにする努力が必要という点。
- NGO の人達と会話をすることで、それぞれの違った視点がわかった。
- JICA と NGO が一つのプロジェクトについて、議論できたことが良かった。
- NGO 側の発言は机上のものではなく、経験にもとづいたもので非常に説得力があった。
- NGO-JICA が一緒に討論したことに大きな意味があると思います。パネルディスカッションも途中からフロアとパネラーとの間で議論できて双方向で良い形になったと思います。
- 討論ワークショップもやる気のある人達の中で、話し合いができ、刺激になりました。この形式で良いと思います。
- アイスブレイキング、評価計画立案のディスカッションは盛り上がり良かった。但し、ディスカッション途中での良い発言、アイデアを記録するなど、議論のプロセスの記録をもっと大事にきちんととれば良いと思う。

3. 今後に向けての改善要望事項等があればお書き下さい。

- 1日目の夜、話し合いに参加したかったです。場所を設定して下さればよかったなと思います。
- JICAの地方センター担当職員の参加をもっと。
- ワークショップの結果や報告後に再度話をする事ができればよかったか。(時間が足りなかった)
- 地方での研修をお願いしたい。(2)
- もっと回数を増やして下さい。
- JICA訪問は今回必要なかったと思いました。(2)(その日の18:30のプログラムと一緒にしていいと感じた。)(職場訪問もなかった。)
- 時間(研修)が長すぎる(1日)。短くして、日数を増やした方が良いのでは。
- 検討委員の方と交流を深められるようなプログラムの充実。
- 全員とお話するのは難しいので、グルーピングをもう少し改善していただけたら・・・。
- どうしてもスケジュールがキツイという印象があるのですが、回数を増やすか日程を1日延ばすかということはムリでしょうか・・・。
- もう少し時間(スケジュール)的に余欲があると良いのではないかと思います。
- WSで概念的な部分の議論ができたのもよかったが、より具体的なインディケーターまで検討できるようにケースが絞ってあってもよかったかもしれない。
- もう少し時間をかけて討議したい部分はあった。
- 名古屋でもこのような相互研修の機会があるといい。
- JICA中部センターと中部地区のNGOとの対話、交流を始めるきっかけ作りに協力したい。
- JICA側ももう少し経験の長いスタッフの参加が欲しい。
- 全体会の進行にももう少し工夫を(発言の求め方や回し方)。
- もう少しタイムプレッシャーをつけても良いかも・・・しれません。→できるまで待つことも大事かも知れませんが・・・(バランスは考えてもよいかもしれません。)
- 第1日目の日程にかなりの無理があった。短時間に夕食と移動をこなすということで体力、精神面での負担があったので、もう少し時間を長くするか、移動にマイクロバスを利用するなどの工夫があるとより良いと思う。
- 地方のNGO、小規模団体等への積極的な参加呼びかけがあると良い。
- 研修グループ分けの際、JICA側が地域部、センター、調査部と所属が似通っていたことは残念でした。(2)
- フロアからの意見を(特に初日)もう少し取っていただければと思いました。
- 最終日のグループ分けも事前に方法を考えていただいた方がよりスムーズだったと思います。
- PCM、PDMについて知らない参加者もいらっしまったので用語等気を付ける必要があると感じた。(2)
- 質問時間がもっとあれば良かったと思う。
- 期間の延長を。(3泊してもいい位に議論が付きないので)
- 議論の「しぼり」が少し強くなってしまった感もあった。もう少し自由に意見をつき合わせて(戦わせて)みたかった。
- 初日のスケジュールがきつかった。各NGOを訪問するのも良いが、参加者の所属するNGO

- を理解するという方法でもよいのではないか？夜は19:00頃にはプログラムを終え、参加者同士の自由な会話の時間として欲しい。
- タイムマネジメントに改善の余地があるように思った。(質問の受け付けなど)
 - もう半日 or 1日ほど時間があれば、今回のテーマ「評価」以外にフリーなディスカッションがもてたと思う。
 - 研修実施後のNGO、JICAでの波及効果を測定してみると面白いのではないかと思う。特に、初日のパネルディスカッション時、委員の方が横にズラリと並ぶ机の配置は威圧感があり発言しにくかったと思う。
 - NGOの宣伝スペースは良いアイデアだったが、JICAも宣伝すべきだった。
 - 事前配付資料に工夫があっても良いかも。特に、評価という切り口だったので、案件の背景理解のためにネパールとフィリピンの国別概要があってもよかった。(必ずしも皆がこの2ヶ国について一般知識があるわけではないので)
 - 日程が少々厳しかった。
 - 「分科会発表」は1回にしてほしい。集中力が持続しません。
 - 議事進行など、司会はもっと柔軟に対応してもらってもよかった。
 - ファシリテーターの進行については、もう少し訓練してもらってもよいと思う。
 - 事務局への要望としては、2日目午後(夜)の時間設定についてです。時間設定(期限)の方針がわからず、「朝まで討論させようとしているのかな」と感じました。グループで作業をする時は、いつまでに何をするかを明確にしないと、だらだらと時間がたっていくと思います。取りあえず、期限と成果品の形を設定し、もし時間がないなら延長するような形をとればよいと思います。(Ex. 11時までに計画表を作るとか)

4. その他感想、ご意見等があればお書き下さい。

- ありがとうございます。(11)
- 楽しかったです。
- 2つのケースのみならず、他のNGO、JICAプロジェクトをケースに討論できるような余裕がほしい。
- 国総研を(安く)NGOの研修のために使わせてほしい。
- ビッシリとしたスケジュールのため、研修参加者とのコミュニケーションが難しかった。
- 是非、今後活かしていきたいと思います。
- 今後も参加できるのなら(1度受講したら2度目はダメという制限がないのなら)、また是非伺いたいです。
- もっと交流を深める場(意見交換会など)の時間を多くとれると、更なる交流が生まれるのではないかと思います。今後もこのような機会があれば参加させていただきたいと思います。
- 導入部分をできるだけ短くして、WSの部分により時間を割けるようにしていただければうれしい。
- 全てよく用意していただき、スムーズに研修が進んだ。
- たくさんの方の意見、コメントが本当に刺激になりました。

- この研修で得たものをいかにプロジェクトに団体にフィードバック出来るかが重要であると思います。
- 充実した三日間でした。
- 立場の違う人、手法の違う人との交流は自己の成長にとって刺激になります。
- 共通点を見つけられたことがよかった。
- JICA と NGO のスタッフの一人一人の（組織としてではなく）出会い、対話の積み重ねがお互いの理解を深め、さらには協力関係をつくっていくことができるのではと感じました。
- 人数が適当だった。これ以上多いとつらい。
- 「相互」というよりは「合同」研修と感じた。（それで良いと思うが）
- 全体的にととても満足しています。
- 協力、交流のカウンターパートナーや相手国に対して、各地域別アプローチが必要であると同様に、国内各地においても、そこに根ざした国際的活動が促進、活性化され、地域ごとの内なる国際化に対する意識啓発を進めることができたならと思います。
- 年に数回、地方センターを拠点に開催してはどうでしょうか。
- NGO-JICA の交流を増やしてはどうでしょうか。
- 大変よく構成されたプログラムだと思いました。運営委員の方々の3日間の積極的なご参加はとてもうれしかったです。
- 検討委員の方や事務局の方がかなり準備して下さったという心配りが感じられました。
- 今後も NGO-JICA の意見交換を継続できたら良いと思います。
- 有意義で楽しく研修を受講しました。
- 研修プログラム中、プログラム外の交流を通して「悩み」を分かち合い、意見を出し合う機会を持てたことは有り難く、この研修で受けた Motivation を Keep し続けていきたいと
思います。
- 両者の事業の違いを鮮明にするもの、お互いに比較してみる作業は非常に有意義だと感じた。違いをはっきり共有した上で連携について話し合ってみたい。
- 各センターでも同様の試みを行うことを提案します。（2）
- NGO-JICA がお互いに学べる機会を与えていただきありがとうございました。
- 非常にスケジュールがタイトであったので、もう一日のばしてもいいのではと思う。他方、参加しやすさを考えると、このままでも良いかもしれない。
- もっと頻度を増やしてもよいのではないかな？
- NGO 以外にも地方自治体なども参加しても良かったのでは。
- 連携するためには NGO のことをもっと理解することが必要。でもその前に、JICA のことをもっと勉強しなくては、と思いました！
- これだけ長時間議論をすることが今まであまりなかったので、自分の考えを整理するのに大変役立った。この人的ネットワークを大切にしていきたい。
- 式次第に若干難あり。タイムスケジュール管理は至難の業だが、もう少し講師に対して厳しくセットしても良いのでは？
- 国際会議場は広すぎる。他研修のコマとの兼ね合いはあると思うが、もう少し小さめのスペースで肉声が聞こえるスペースで実施しては、臨場感があるのでは？
- 人養課の皆様大変お疲れさまでした。調研課で事務局を努めている自分にとっていろいろ教訓が得られましたし、参考になることもたくさんありました。この研修はとて意味のある成果のあるものだと思いますので、今後広く発信して、また長く続けていって下さい。

(研修関係者)

1. 今回の研修は所期の成果を上げることができましたと思われますか？

- 十分できた・・・・・・・・・・ 3名
- できた・・・・・・・・・・ 2名
- どちらともいえない・・・・ 0名
- あまりできなかった・・・・ 0名
- できなかった・・・・・・・・ 0名
- 回答なし・・・・・・・・・・ 1名

具体的な成果だと思われるものをご記入下さい。

- 評価の理念と方法についてかなりつつこんだ話し合いができた。
- 「住民の問題解決能力を高める」という新しい Proj の考え方が共有できた。
- 参加者同士の相互理解が進んだ。
- 評価計画を立てる上での留意点や確認すべきこと（特にプロジェクトをよく理解する必要性）などを検討し、深く考えることが出来た。
- 2つの事例についてよく知ることになり、JICA 事業、NGO 事業の良い点、弱点を考える機会となった。
- 互いに（JICA、NGO）キタンなく意見交換し、互いにそれぞれの特徴を生かし、より高めてゆく上で、刺激し合ったのではないか。
- NGO-JICA の共通点／相違点が明確になったこと。
- NGO-JICA の人的相互交流が進んだこと。
- 当会（(特活)ヒマラヤ保全協会）としては、自分たちの姿（長所／短所）がわかり、自信につながった。
- 評価5項目という形式ではなく、何のため、誰のために評価するのかが原点である、という基本認識ができた。
- 事業の進捗プロセスを、いかに正確に公開して行くことが重要かを確認できた。
- NGO-JICA 双方の理解、共同ワークショップによる具体的成果（誰のため、何のために評価を実施するのか。又、それを踏まえての計画／実施段階で留意すべき点）の発現ができたこと。

2. 研修中特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい。

- 事例分析から評価計画作成の分析会は、中身が濃かった。
- 初日のパネルディスカッション、とてもよくまとまって内容のあるものだった。
- 講演者の組み合わせがとても良かった。
- 分科会の進め方がとても良かったのだろう。
- 目にみえないことをどう評価するか議論したこと。
- ワークショップ
- 具体的成果の発現、分科会Ⅰと同Ⅱのつながり。

3. 今後に向けての改善要望事項等があればお書き下さい。

- 今回のような若手向けもの以外に中堅用の Prog ができないか。
- 事例分析を予定を変更して、分科会内で行った。結果として、その方が良かったと思うが、スケジュール作りの中で、現実的な線を再度考えた方がよいだろう。
- 参加者のグループ分け-特に JICA の方は、同じ分科会に同部署の方、同分野の方が重なることがいくつかあったようだ。
- 外の風にあたる時間が欲しかった。
- 時間不足。3日にしましょう。
- JICA 関係者の NGO 訪問の時間をもう少し取れないか。(熱心に説明を受け、質問をしたため、夕食を取る時間がなかった) 日程の変更が困難な場合は、訪問先を1カ所にしてはどうか。

4. その他感想、ご意見等があればお書き下さい。

- 若い人たちがとても積極的なのに感心しました。また JICA の参加者の皆さんも柔軟な考えの方ばかりでよかったです。
- おつかれさまでした。
- 検討委員/事務局のみなさんありがとうございます。
- JICA、NGO それぞれの業務へのフィードバックが相互研修よりなされるようにして行きましょう。
- 自分自身が偶然にも2年間「マンガラの会」に属し、ドナーのようなことをしていたので、マンガラさんの写真を見て感動しました。
- NGO-JICA 双方が、共に理解し学ぶとてもよい機会となりました。研修前の、NGO の JICA に対する認識のギャップに驚いています。これを解決する方策を JICA として取る必要がある。又、NGO 側からも、ご意見をいただければ幸いです。

2. 研修内容

事務所相互訪問

1. 概要

NGO、JICA 双方の相互学習を深めるために、それぞれの組織概要や事業の進め方などのバックグラウンドを理解することを目的として、相互研修の最初のプログラムとして事務所相互訪問を行った。双方のプロジェクト運営方法について議論する前に、組織概要や事業の仕組み、事業の運営体制、事務所の雰囲気などを実際に肌で感じることはその後の議論に非常に役立ったのではないかと思われる。

2. 訪問スケジュール

<NGO スタッフ→JICA 本部訪問>

時間	項目	講師
13:15	集合、受付	
13:30 ~14:20	JICA事業概要	JICA企画・評価部企画課 課長代理 三角幸子
14:20 ~14:45	JICAの改革、評価のねらい等について	JICA企画・評価部評価監理室 調査役 長澤一秀
14:50 ~15:30	国内でのNGOとの連携プロジェクト、今後のJICAとNGOの関わりについて	JICA国内事業部国内連携促進課 課長代理 西野恭子
15:30 ~16:30	プロジェクト方式技術協力について	JICA森林・自然環境協力部計画課 課長代理 吉浦伸二
国際協力総合研修所へ移動		

<JICA スタッフ→(特活)国際協力 NGO センター及び NGO 事務所訪問>

時間		JICAスタッフ
13:15	集合、受付	
13:30 ~14:20	(特活)国際協力NGOセンター訪問 「NGOのプロジェクト運営・支援体制と国際協力活動の現状を理解する」	(特活)国際協力NGOセンター 事務局次長 山崎唯司
14:20 ~15:00	各事務所へ移動	
15:00 ~16:20	NGO事務所訪問 「NGO団体表敬訪問ならびにNGOの現状を理解する」 地球の友と歩む会 (LIFE) 又は 日本国際ボランティアセンター (JVC)	地球の友と歩む会 (LIFE) 事務局次長 米山敏裕 日本国際ボランティアセンター (JVC) 事務局長 谷山博史
国際協力総合研修所へ移動		

3. NGO 訪問報告

(特活) 国際協力 NGO センター (JANIC) 訪問

職員全員がほぼ時間通りに集合したので予定時刻に講義を開始。JANIC 山崎次長を囲み NGO の活動についての概要説明が 30 分ほど行われ、その後 20 分ほど質疑応答の時間が設けられた。また国際協力 NGO センター内の資料室を閲覧した。

概要説明の冒頭に山崎次長より「俺がやらなきゃ、誰がやる！」NGO の理念と熱意から始まり、NGO の誕生した背景、経緯の説明から活動事例や体験談などを交えた講義が行われた。

質疑応答では NGO ・ NGO 活動の事例や補助金を巡る政府と NGO との関係など活発な質問が職員から出ており、山崎次長からも丁寧な説明が行われた。

地球の友と歩む会 (LIFE)

移動時間が短いこともあり 15:00 前に到着。先方は会議中であったが、米山次長の好意で予定時間より早めに講義を開始。

NGO 関係の活動に係わることになった経緯、「地球の友と歩む会」立ち上げにい至った背景、活動事業内容などの説明が行われた。また、規模の小さい NGO の財源、事業支出、運営についての説明も行われた。米山次長の人柄もあり和やかな雰囲気の中で、活発な意見交換が行われた。

日本国際協力ボランティアセンター (JVC)

谷山博史事務局長より、センターの概要説明を受けた。さらに活動事例紹介では、過去の教訓を踏まえ JVC の全関係者が協議し、作成した「行動基準」による案件の選定・実施が行われていることや数々の現場から得られた貴重な体験談が披露されたので、熱心な質疑応答が予定時間を大幅に超えて行われた。

<所感>

日頃恵まれた環境の中で政府予算を使い国際協力の業務に従事している職員が NGO 訪問を通して経営状況の厳しい不安定な環境の中でボランティア活動を維持する NGO 活動の難しさを目の当たりにしたことは、貴重な体験であったと思われる。

研修冒頭の「俺がやらなきゃ、誰がやる！」は NGO の理念として若い職員に浸透していたと思う。

平成13年度NGO-JICA相互研修事務所相互訪問訪問先別リスト

訪問先 JVC：(特活)日本国際協力センター LIFE：(特活)地球の友と友社会	応募者氏名	所属団体名	所属部署/担当
JVC	石井 加奈子	JICA中部国際センター	業務課
	大竹 雅洋	JICA農業開発協力部	畜産園芸課
	岡村 美由規	JICA中南米部	南米課
	林 憲二	JICA農林水産開発調査部	農業開発調査課
	星 光孝	JICA国際緊急援助隊事務局	人道援助調整室
	馬淵 俊介	JICA社会開発調査部	社会開発調査第一課
	室谷 龍太郎	JICA国際協力総合研修所	国際協力専門員室
	渡辺 雅夫	JICA筑波国際センター	業務第二課
	LIFE	小峰 雪代	JICA調達部
澁谷 和朗		JICA社会開発協力部	社会開発協力第二課
徳田 小矢子		JICA国内事業部	国内連携促進課
服部 浩昌		JICA国際協力総合研修所	調査研究第二課
松尾 沢子		JICA秘書室	
山形 律子		JICAアジア第一部	計画課
吉田 憲		JICA中南米部	南米課

4. JICA 事務所訪問

「JICA 事業概要」

企画・評価部企画課三角幸子課長代理

JICA 評価の講義に先立ち、「JICA の概要」について20分程度の講義が行われた。講義終了後参加者より次々と質問や意見が出され、大幅に時間を延長してしまった。

- *分野の力が大きくて、地域部との連携がとれていない様に思われる。
- *在外事務所の権限が弱いのではないかと、いちいち本部へ問い合わせをかけなくてはならず、現場重視の NGO としては不便である。
- *ODA 全体の予算が削減されていく中で、社会開発が中心になっていくのか？移住関係と投融資の事業はどうか？
- *経済情勢が正常化となり、ODA が再び増額された場合に国別形態別援助の方向性はどうか？
- *国別援助計画は ODA 大綱に力をいれてくのか？
- *ODA 削減と特殊法人であるための厳しい現状？
- *参加型といってもコンサルタントへの委託は 90%になっているのでは？等々

「JICA の改革、評価のねらい等について」

企画・評価部評価監理室長澤一秀調査役

前半の時間が大幅に延長してしまったため、途中までとなり、後半は夕方より開始される研修内で行われることとなった。

「国内での NGO との連携プロジェクト、今後の JICA と NGO の関わりについて」

国内事業部国内連携促進課西野恭子課長代理

国内連携促進課より、「国内事業とは？」、「連携の背景」、「連携の意義」、「NGO・JICA の連携の現状」、「展望」の講義が行われた。

「プロ技事業部・各地域部の担当者との交流」

3つの班に分かれ活発な意見交換が行われた。

<所感>

1. JICA 事業については参加者が JICA に対する質問や意見を多くもって研修に参加している様子で、活発な質疑応答が行われたが、時間が足りなかった。
2. 「評価」の講義は、今回の研修テーマであり、重要な講義であるが、時間不足から講義を中断して、夕方より開始される研修内で残りの講義を行うこととなった。JICA 事務所訪問は時間に制限があるため、当初より研修内で時間をかけて行うべきであった。

3. 国内連携促進課の講義も、参加者にとって大変興味深い内容であったが、時間がなく、質疑応答の時間が全く取れなかった。
4. プロ技・地域部の担当者との交流は各班とも大変活発な意見交換が行われた。折角 JICA 事務所を訪問しているのだから、職員との交流や現場の雰囲気を見学する時間を多く取った方が、参加者にとって有意義であると思う。



<LIFE 事務所を訪問する JICA 職員>



<JICA 本部を訪問する NGO 職員>

NGO-JICA相互研修・JICA事務所訪問

		担当者
1班	農業開発協力部畜産園芸課 アジア1部東アジア課	晋川 眞 落合直之
	西井和裕	フィリピン情報センター・ナゴヤ
	帖佐理子	じゃっど (JADDO)
	青西靖夫	日本ラテンアメリカ協会ネットワーク
	小栗宏紀	日本口唇口蓋裂協会
	大路ゆかり	アジア女性自立プロジェクト
2班	社会開発協力部計画課 アフリカ・中近東・欧州部中近東・欧州課	南部良一 武藤亜子
	高見早苗	山口ケニアを知る会
	吉川 剛	社会福祉法人 基督教児童福祉会
	大石常夫	特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン
	中野恵美	特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター
	森本由布子	シェア＝国際保険協力市民の会
	佐伯美苗	特定非営利活動法人 アムダ (AMDA)
3班	森林自然環境協力部森林環境協力課 アジア2部南西アジア・大洋州課	前田陽子 石原伸一
	池間哲郎	NGO沖縄アジア・チャイルド・サポート
	中島隆宏	財団法人 アジア保険研修財団
	古澤めい	草の根援助運動
	後藤裕子	特定非営利活動法人 難民を助ける会
	武藤香織	特定非営利活動法人 地球の友と歩む会

講演

講演テーマ：「評価とはなにか」

講師： 開発援助コンサルタント 源由理子

国際民衆保健協議会 日本連絡事務所代表 池住義憲

JICA 企画・評価部評価監理室調査役 長澤一秀

講演要旨：

研修が始まる前から、検討委員会の間では、評価とはなに、との固定した概念は存在しないとの認識があった。よって研修への導入として行われる講演では、「評価とはなにか」というテーマに対する答えを示すことはせず、受講者各自がこのテーマについて考えるきっかけをつくる構成とした。講演には、同テーマに見識が深く、かつ違う背景を持った3名の方々にそれぞれ話して頂くこととなった。源氏に評価の一般的・基本的な考え方を示してもらった上で、池住氏、長澤氏にそれぞれ NGO 的見方、JICA 的見方の例を示してもらった。

双方のプロジェクトを研究し、議論を進める前に、受講者のバックグラウンドとして評価の基本的捉え方を理解し、その例を示され、NGO と JICA 違いを感じることは、その後の議論の土台となったのではないかと思われる。

●開発援助コンサルタント 源由理子

1. 評価の5W1Hについて

- (1) WHY? : マネジメント支援、学習効果、アカウンタビリティ
- (2) WHAT? : 有効性、効率性の他、目に見えないものの評価も必要
- (3) WHO? : 内部、外部、チーム等
- (4) WHEN? : 事前、中間、終了時、事後等
- (5) WHERE? : 状況に応じ変化。理論的にはどこでも可能。
- (6) HOW? : Before/After, With/Without, 関係者への調査、観察等

2. 評価結果の活用

フィードバック方法。情報提供方法。

3. 評価の手順

評価のデザイン → 評価調査の実施 → 評価結果のまとめと情報公開

●JICA 企画・評価部評価監理室調査役 長澤一秀

1. 事業の評価とは

プロジェクトの妥当性や価値を科学的かつ客観的に判断する作業



マネージメント、ラーニング、アカウントビリティに活用

2. JICA の評価に関する各要素

(1) ODA 体系：政策レベル、プログラムレベル、プロジェクトレベル

(2) プロジェクトサイクル：事前、中間、終了時、事後評価等

(3) 評価実施体制：在外、関係事業部、評価監理室等の関係

(4) 評価実施主体：内部、外部評価等

(5) フィードバック：情報の提供と、活用手法

(6) アカウントビリティと情報公開：説明責任と情報公開の責任

3. よい評価の基準 (JICA 評価)

○有用性、○公平性・中立性、○信頼性、○被援助国の参加の度合い

●国際民衆保健協議会 日本連絡事務所代表 池住義憲

1. 評価とは

評価とは 次のステップへ進むプロセス である。

(Evaluation is a milestone to proceed to next step)



Evaluation とは自分にとっての意味・価値を掘り起こすことである。

2. プロジェクトのタイプ

①：問題を解決する・除去するプロジェクト (測定可能)

②：問題解決能力を構築・高めるプロジェクト



NGO が関心のあるプロジェクトで、どの様に評価するかが重要。

マトリクスを使うのではなく、Participation Evaluation の実施。

3. NGO の評価

① ドナーでありながら正しく情報を得る。


② 宗教的側面の影響

評価の5W1Hなど

源 由理子
 国際開発コンサルタント/アユス仏教国際協力ネットワーク
 ©NGO-JICA相互研修


**評価とは：
単なる成績表ではない**

- v 「変化」の確認
- ↓
- v 価値判断(成否)
- ↓
- v 貢献・阻害要因は何か
- ↓
- v 教訓・提言→フィードバック、活用、学習



2


**Why?
なぜ評価するのか**



- v マネジメント支援
 - ・評価対象プロジェクト改善のための情報提供
 - ・協力を継続するかどうかの検討に資する情報の提供
- v 学習効果
 - ・新規・類似プロジェクトへの教訓
 - ・キャンパシー・ビルディング
- v 資金提供者への報告義務(アカウンタビリティ)
 - ・支援を得る

3

What?
何を評価するのか



- v プロジェクト実施の必要性 (relevance)
- v 有効性 (effectiveness)
- v 効率性 (efficiency)
- v インパクト・影響 (impact)
- v 持続性 (sustainability)
- v 実施プロセスの妥当性 (process evaluation)
- v その他評価の目的に応じ... (エンパワメント、ジェンダーなど)

Minamoto 4


目に見えにくいものをどう評価するのか？

- v 主体性、自信、連帯感、エンパワメント....
- v 日本側が学んだこと
- v プロジェクトの副産物(?)
- v 第三者による定量的評価では捉えにくい
- v 定性的情報の変化を捉える
- v 代理指標を考える

Minamoto 5

Who?
誰が評価を行うのか


- v 内部関係者による評価
 - ・内部事情に詳しい反面、客観性に欠けることも
 - ・主にマネジメント支援、学習効果
- v 外部第三者による評価
 - ・客観性は確保しやすいが、情報が得にくいことも
 - ・主にアカウンタビリティの確保
- v 地域住民による評価
- v 混合チーム



Minamoto 6

When?
いつ評価するのか

- v 事前評価／診断的評価：
 - プロジェクト立案へ反映
- v 中間評価／形成的評価
 - 実施中プロジェクトの軌道修正へ反映
- v 終了時評価／総括的評価
 - プロジェクト終了の判断
 - 実施方針の見直し
 - 類似プロジェクトへの反映
- v 事後評価／インパクト評価



7

Where?
どこで評価を行うのか

- v プロジェクトの内容、対象社会の情報が入手できる限り、理論的にはどこでも可能
- v 評価の目的、実施主体、実施予算などによって場所が異なる
- v 例(第三者による評価)
 - 事前準備⇒報告書や資料による情報収集
 - プロジェクト・サイトでの現地調査

8

How?①

<ul style="list-style-type: none"> v Before / After ・同じ対象の実施前、実施後の比較 ・外的影響を排除できない ・定期的なモニタリング・評価が必要 	<ul style="list-style-type: none"> v With / Without ・プロジェクトの対象グループと比較グループの比較 ・ネットの効果 ・倫理的問題
---	---

9

How?②

複数の手法を使い、
多様な視点から見る

- v 関係者に対する調査
 - 面接(個人、グループ、キー・インフォーマントなど)
 - 少人数グループでの討論(フォーカス・グループ)
 - アンケート調査
 - 試験、など
- v 観察
 - 一般的観察
 - 参与観察(調査者が対象社会に住み込む)
- v PRAなどによる参加型調査手法
- v 文献調査

Minamoto 10

評価結果の活用

- v 評価結果は活用されて初めて意味がある
 - 既存のプロジェクトの改善
 - 類似プロジェクトの計画への反映
 - 資金提供者への報告
 - NGOの使命の再検討
 - キャパシティ・ビルディング
- v 情報提供方法
 - 報告書フォーマット類の整備
 - 共通の評価方法論
 - 報告会などの実施
 - 情報公開方法の検討
(ネット、ニュースレター、データベースなど)

Minamoto 11

評価の手順

- v 評価のデザイン
 - ・いつ、何のために、何を、どのように評価するのか
 - ・関係者の合意形成⇒評価の第一歩
- v 評価調査の実施
 - ・インタビュー、フォーカス・グループ、アンケート等の実施
- v 評価結果のまとめと情報公開
 - ・誰に対し、どのように情報を提供するのか

Minamoto 12

NGO-JICA相互研修（評価）

JICAの事業評価について

www.jica.go.jp/evaluation/evaluation/evaluation.html

- ・ JICA事業評価の概要
- ・ 評価手法(PDMと評価5項目)
- ・ 評価調査の実施方法

国際協力事業団
企画・評価部 評価監理室
長澤一秀

事業の評価とは

- ・ プロジェクトの妥当性や価値を科学的かつ客観的に判断する作業

↓

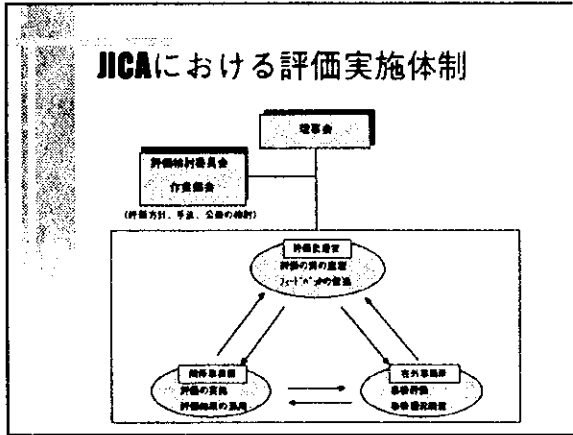
- ・ 結果を事業監理（軌道修正、協力終了の判断）の材料として活用する（マネージメント）
- ・ 援助関係者の学習効果を高める（ラーニング）
- ・ JICA事業に対する説明責任を果たす（アカウンタビリティ）

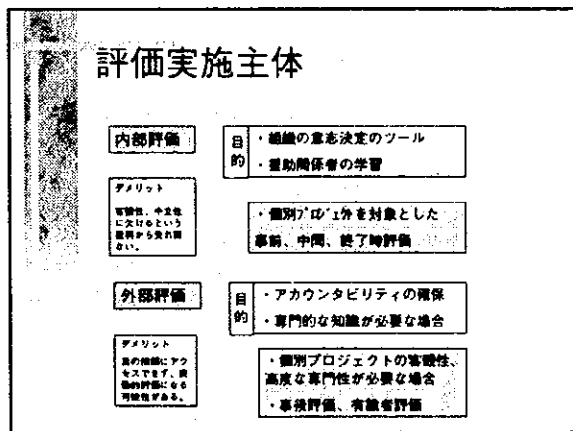
↓

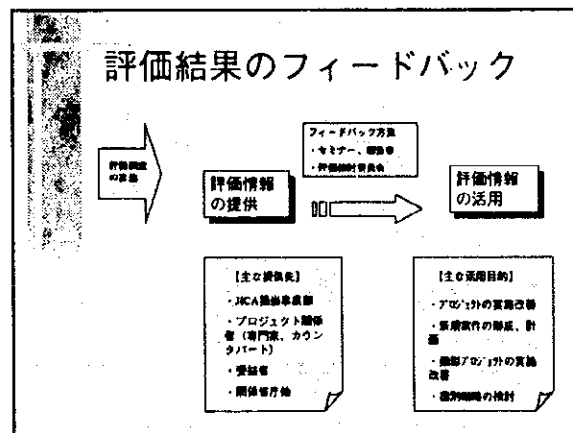
- ・ 国民の理解を得たより効果的・効率的な援助の実施を目指す

評価をめぐる最近の動き（1）

- ・ JICAでは「援助は役だっているか」という国民の疑問に答えるために1997年から評価を導入
- ・ 「21世紀に向けてのODA改革懇談会報告書」（1998年1月）にて「第三者評価の拡充、評価手法の開発、フィードバック状況の広報」などを提言
- ・ 「ODA評価体制の改善に関する報告書」（2000年3月）にて「外部評価委員会の設置、事前から事後までの一貫した評価システムの導入」を提言
- ・ 「ODA評価研究会報告書（外務省）」（2001年3月）にて「政策レベル・プログラムレベル評価の拡充、フィードバック体制の強化、評価人材の育成」を提言







アカウンタビリティの確保と情報公開

アカウンタビリティとは

- ・ 納税者である国民に対し、実施当事者である組織がきちんと事業を実施していることを説明し、事業の責任を負うこと。
- ・ アカウンタビリティの要件 ① 事業目標が明確であること、② 組織の意思決定プロセスの透明性があること、③ 資源の活用や実績が正確に把握されていること

評価情報の公開

- ・ 評価を行って特定した事業の阻害要因などについては、その対応策としての提言を含めた評価情報として公開が望ましい。
- ・ 質の高い評価情報の公開は、アカウンタビリティ確保のために不可欠である。

良い評価の基準

- ・ 有用性
 - 評価情報が想定される利用者のニーズに合っている
 - 評価情報が入手しやすい
 - 評価のタイミングがよい
- ・ 公平性と中立性
 - 中立的な立場で行う
 - 公平な評価を行う
 - 評価目的達成のために意思決定側とのコミュニケーションを密にする
- ・ 信頼性
 - 評価対象の専門知識と体系化された調査手法に通じている
 - 評価のプロセスの透明性を確保する。
 - 評価結果において、評価者と見解の異なる意見も平等に記載する
- ・ 被援助国側の参加の度合い
 - 評価のプロセスで被援助国側とのコミュニケーションを密にする

評価者の心構え

- ・ 組織や事業の仕組みを十分に理解していること
- ・ 評価の目的を十分に理解していること
- ・ 正確な情報の伝達に努めること
- ・ 客観的なデータに基づく中立的・公平な調査を行うこと
- ・ 情報提供者、評価対象者への配慮を十分に行うこと
- ・ 関係者との信頼関係を構築すること
- ・ 異文化の特徴を十分理解しておくこと

プロジェクト評価手法

- PCM手法のツールとして、PDMを活用
- 事業の目的に照らして検証項目を考える

⇒ニーズとの合致、当初目標の達成度、持続性、効率性
事業の与えるインパクト、住民組織の強化としての有効性など

⇨評価5項目 ※ (DAC評価5項目)
妥当性、有効性 (目標達成度)、効率性、
インパクト、持続可能性

プロジェクト評価におけるPDMの活用

プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM)

プロジェクト要約	指標	指標入手手段	外部条件
上位目標	上位目標の達成度を測る指標目標値	左記情報の入手先	
プロジェクト目標	プロジェクト目標の達成度を測る指標目標値	左記情報の入手先	
成果	成果の達成度を測る指標目標値	左記情報の入手先	プロジェクトではコントロールできない条件
活動	投入 活動に必要な資源 (人材、資器材など)		前置条件 活動を始める前にクリアする条件

プロジェクト評価におけるPDMの活用

PDM活用の意味/特徴

- 評価作業を行う上でPDMをツールとして活用
 - プロジェクトの目標、活動内容やリスクが明記されるため、具体的な調査項目を立てやすい
 - 目標値が設定されるため、達成度合いの妥当性の判断基準となる
 - 指標を入手する方法が明記されるため、調査方法を検討する際に役に立つ
 - 入手可能なモニタリング情報の範囲がわかる
 - 計画の論理性の検証の役に立つ

評価5項目と主な調査項目

評価5項目(1)

<ul style="list-style-type: none"> • 妥当性 relevance 受益者のニーズとの合致 - 相手国の開発政策、援助政策との整合性 - 国別事業実施計画との整合性はあるか - 計画内容の妥当性ではない ⇒上位目標、プロジェクト目標との整合性 	<ul style="list-style-type: none"> • 目標達成度 effectiveness - ターゲット・グループへの直接的な便益 - 「成果」や「上位目標」の達成度は含まない <p>⇒プロジェクト目標達成度、成果との関連、外部条件の変化</p>
---	--

評価5項目と主な調査項目

評価5項目(2)

<ul style="list-style-type: none"> • 効率性 efficiency - 効率的に投入が成果に転換されたか - 投入は十分に活用されたか - 投入はタイミング良く実施されたか - 投入の規模や質は適切か ⇒投入実績と成果達成の関係性、外部条件の変化 	<ul style="list-style-type: none"> • インパクト impact - プロジェクト実施による、より長期的、間接的効果、波及効果など - 正・負の影響 <p>⇒上位目標達成度、プロジェクト目標との関連、外部条件、その他の影響</p>
---	---

評価5項目と主な調査項目

評価5項目(3)

<ul style="list-style-type: none"> • 自立発展性 sustainability - 協力終了後も効果が持続していくか ⇒プロジェクト目標、上位目標の達成状況 ⇒成果、活動、投入を参考に組織能力・技術力の側面からみる ⇒その他横断的側面 	<ul style="list-style-type: none"> • 評価5項目以外の視点 - 特定の目的を伴う評価の場合 - 住民組織の強化の程度 - リボルビングファンドが機能しているか
--	---

現地調査の実施

効果発現・阻害要因の分析

1. **PPM**のロジックによる検証
 一例：「目標達成度」の低さ⇔成果・外部条件
2. 「横断的視点」から要因を分析
 一政策、組織・制度、経済・財政、技術、社会・文化、環境等の側面
3. 各評価項目ごとの結果から因果関係を分析
 一例：「目標達成度」の低さ⇔「妥当性」の低さ

現地調査の実施

結論・教訓・提言の策定

- ・ 提言策定の留意点
 - ▶ 提言先のニーズ、評価の目的と合致しているもの
 - ▶ 具体的かつ実現可能性があるもの
 - ▶ 代替案の提示もある（提言先の検討に委ねる）
 - ▶ 必要に応じ、短期、中期、長期的等の時間的要素を加味
 - ▶ 最終案の提示前に、活用する側との協議の場を持つ

報告書の作成とフィードバック

報告書の作成

- ・ 評価調査結果要約表
- ・ 第1章：終了時評価調査の概要（プロジェクト概要を含む）
- ・ 第2章：終了時評価の方法を明確に記述、PPM、情報・データ収集方法など
- ・ 第3章：上記方法に基づいた調査結果（5項目評価、結論、教訓、提言）

フィードバック方法

- ・ 報告会、セミナーの開催
- ・ 関係部署への報告書の配布
- ・ ホームページなどでの公開

COPY

1999年10月27日(水)
NGOとの連携による参加型村落開発コース報告会
於：国際協力事業団(JICA)大阪国際センター

参加型研修方法論 (Participatory Training Methodology, PTM) の

基本理念および原則

関西NGO協議会 池住義憲
(コース・ファシリテーター)

1. すべての人は豊かな経験、知識、技術、アイデア、パワーをもっている。
(Everyone has a rich experience, knowledge, skills, ideas and power.)
2. 人々の知っていることから始め、私たちのもっているもので築き上げる。
(Start with what they know. Build on what we have.)
3. 経験から学ぶことはできない。経験を「分析する」ことによって学ぶことができる。
(We can not learn from experiences, but can learn by "analyzing" experiences.)
4. 経験の共有は学びであり、学びとは経験の共有である。
(Sharing is learning. Learning is sharing.)
5. 役割・責任を担うことが人を育てる。(Taking responsibilities makes a person capable.)
6. 変化は可能である。(Change is possible.)
7. 変化は内側から…。(Change comes from inside)
8. 内容よりもプロセス重視。(Process than content.)
9. プロセスが内容に、内容がプロセスに。(Process becomes content. Content becomes process.)
10. コンテキストにまさるテキストはない。(No better TEXT than CONTEXT.)
11. ファシリテーター、それは「共に旅する人」！
(Facilitator as a "Co-Traveller"!!)

“教育とは、
未完成な人間が未完成な世界に批判的に立ち向い、
世界を変革(解放)することによって自らを変革(解放)する
終わりのない過程である”(パウロ・フレイレ)

当研修コースにおける「評価」(Evaluation)の考え方について(メモ)

関西NGO協議会 池住義憲
(コース・ファシリテーター)

I. 現在、JICAが採っている評価基準

- ①実施効率性 (Efficiency)
- ②目標達成性 (Achievement)
- ③効果 (Effectiveness)
- ④計画の妥当性 (Relevancy)
- ⑤自立発展性 (Self-Reliance)

*これは、1991年に経済協力開発機構(OECD)の下部組織である開発援助委員会(DAC)で採用された事業(プロジェクト)評価基準。評価の主体者および実施者はすなわち事業(プロジェクト)の主体者。

II. 参加型研修手法(PTM)における「評価」の考え方

・「評価」の英語表現「Evaluation」の語源は、「Ex-」(外へ)と「Value」(価値)という二つのラテン語から構成されている。すなわち、「Evaluation」(評価)とは、本来、「価値を引き出す」ということを意味している。

・参加型研修における「評価」の理解は、基本的にこのラテン語語源に基づいている。すなわち、「一緒に創り上げてきた研修の過程(プロセス)と内容(コンテンツ)が自分の仕事、生き方にとってどういう意味・学び・価値(Value)があったかを引き出す(Ex-)ことであると理解する。優劣をはかったり査定またはジャッジするのではなく、おこなったすべてのことに意味・学び・価値がある、という考え方に立つ。

・しかもその評価は、他者(研修実施主体者やファシリテーターなど)が「指摘」したり「教授」したりするのではなく、研修員自らが掘り起こし、引き出すのである。研修員が評価の主体者となる。

・そうしたプロセスが参加者にとって「学びの過程」であり、今までの学びの「再学習の過程」(Re-Learning)となる。自分で自分を更に強める過程(Self-Empowering Process)となる。これが次への行動(Action)の出発点となる。

III. 当コース開催期間中における「評価」の具体的方法

1. 研修員による評価の方法

- ・一日の振り返り (Day Evaluation または Daily Reflection)
- ・モジュール毎の振り返り (Module Evaluation または Module Reflection)

- ・コース全体の振り返り (Overall Evaluation または Overall Synthesis)
- ・モジュール振り返り用紙記入 (Module Reflection Paper)
- ・JICAの「今後の活動のための質問票」(Questionnaire for Future Programmes)
- ・当コースのファシリテーターチーム作成による「今後の活動のための追加質問票」(Extra Pages for Questionnaire for Future Programmes)
- ・一日の研修レポートづくりと発表 (Daily Report) ←有志研修員
- ・モジュールレポートづくりと発表 (Module Summary Report) ←有志研修員
- ・研修帰国後の行動計画づくり (Action Plan)

2. ファシリテーターによる評価の方法

- ・研修員が評価したもの (引き出し意味・価値・学び) の分析
- ・原則的には毎日のファシリテーター・ミーティングでの一日の振り返り
- ・各モジュール終了毎にファシリテーター・ミーティングでそのモジュールの振り返り
- ・研修員のアクション・プランの分析 (内容、視点、方向、姿勢、理念など)
- ・コース終了時および終了後にファシリテーター・ミーティングでコース全体の振り返り
- ・コース終了後に「研修員別振り返りの流れ一覧」作成とその分析 (意味・価値の引き出し)
- ・1～2年後に再び” Open-Ended Dialogue Paper” を送付 (フォローアップを兼ねて)

3. 送り出し団体および主催団体による評価の方法

以上

分科会

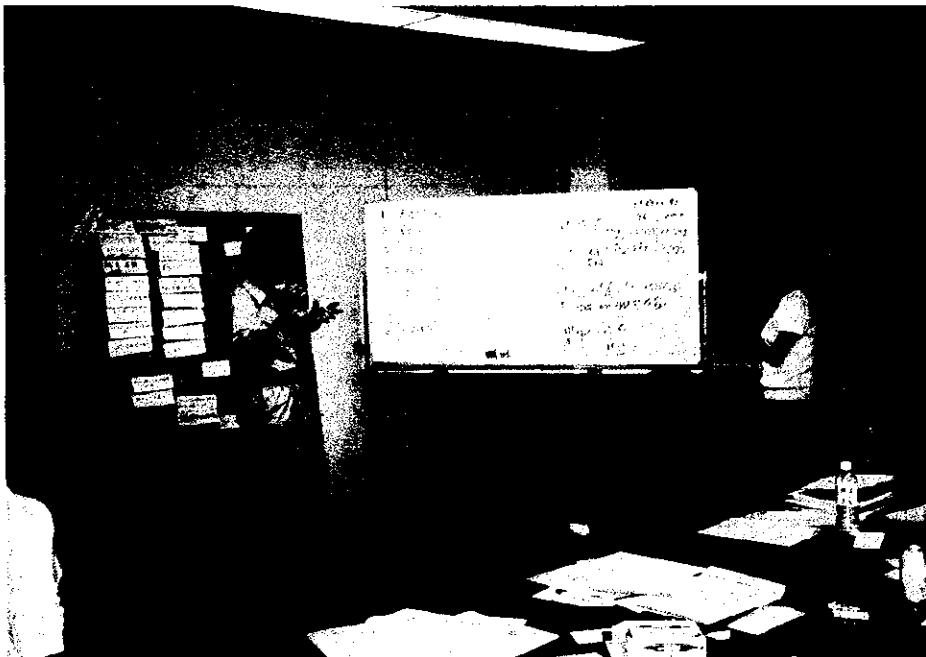
1. 概要

4つの分科会に分かれ、事前に紹介された2つのプロジェクト（NGO 案件「ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト」・ JICA 案件「フィリピン・ボホール総合農業振興計画」）のうち、どちらか1つを事例として各分科会において評価計画作成を行った。分科会では、実際のワークショップの構成・進行は各ファシリテーターが行うこととした。

各分科会での議論の流れ、成果は次頁以降に各ファシリテーターがまとめているとおり。また、各グループが全体会発表の際に作成した OHP シートも各分科会報告の添付資料として取りまとめている。

2. グループ分け

参加者の経験（年数、評価経験の有無）、ジェンダーバランス、NGO と JICA スタッフの数的バランスなどを考慮し、4グループに分けた。



<分科会で議論をする参加者>

平成13年度NGO-JICA相互研修ワークショップグループ一覧

グループ/ファシリテーター	応募者氏名	所属団体名	所属部署/担当
A/小嶋 雅彦	佐伯 美苗	特定非営利活動法人 アムダ (AMDA)	コミュニティサービス局/海外プロジェクト調整、緊急救援に関わる調整
	帖佐 理子	じゃっど (JADDO)	代表/総括
	西井 和裕	フィリピン情報センター・ナゴヤ	運営委員/政策提言、スタッフ企画、会報編集
	吉川 剛	社会福祉法人 基督教児童福祉会	国際精神里親運動部/会計・庶務セクション/会計・庶務
	岡村 美由規	国際協力事業団 中南米部	南米課
	室谷 龍太郎	国際協力事業団 国際協力総合研修所	国際協力専門員室
	山形 律子	国際協力事業団 アジア第一部	計画課
	吉田 憲	国際協力事業団 中南米部	南米課
B/枝木 美香	後藤 裕子	特定非営利活動法人 難民を助ける会	アフリカ事業調整/総務
	高見 早苗	山口ケニアを知る会	本部/代表
	中島 隆宏	財団法人 アジア保健研修財団	研修/フィリピン/国別研修、国際研修、JICA書記研修
	中野 恵美	特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター	ハレスチナ事業
	澁谷 和朗	国際協力事業団 社会開発協力部	社会開発協力第二課
	徳田 小矢子	国際協力事業団 国内事業部	国内連携促進課
	服部 浩昌	国際協力事業団 国際協力総合研修所	調査研究第二課
	星 光孝	国際協力事業団 国際緊急援助隊事務局	人道援助調整室
C/長畑 誠	大石 常夫	特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャハン	東京事務所/ミャンマー事業担当
	小栗 宏紀	日本口唇口蓋裂協会	海外医療診療隊派遣業務/医療物品・医薬品の調達、輸送業務
	武藤 香織	特定非営利活動法人 地球の友と歩む会	インドネシアでの緑化事業管理、ワークショップ運営、国内業務全般
	森本 由布子	シェア=国際保健協力市民の会	東京事務局/カンボジア事業担当
	大竹 雅洋	国際協力事業団 農業開発協力部	畜産園芸課
	林 憲二	国際協力事業団 農林水産開発調査部	農業開発調査課
	松尾 沢子	国際協力事業団 秘書室	
	馬淵 俊介	国際協力事業団 社会開発調査部	社会開発調査第一課
D/竹内 康人	青西 靖夫	日本ラテンアメリカ協力ネットワーク	代表/プロジェクト管理
	池間 哲郎	NGO沖縄アジア・チャイルド・サポート	代表
	大路 ゆかり	アジア女性自立プロジェクト	業務全般
	古澤 めい	草の根援助運動	事務局、フィリピン、事業部/事務全般、フィリピンとの海外協力業務、スタッフ育成・トレーニング
	石井 加奈子	国際協力事業団 中部国際センター	業務課
	小峰 雪代	国際協力事業団 調達部	契約第一課
	渡辺 雅夫	国際協力事業団 筑波国際センター	業務第二課

全体会 I

1. 概要

分科会でのディスカッション、評価計画作成作業の結果を各グループ毎に紹介し、発表の都度質疑応答を行い、参加者全体で共有した。4グループに分かれた各分科会では、それぞれ事例紹介された NGO と JICA のプロジェクト事例について1つのプロジェクトを選択（4グループで NGO と JICA のプロジェクトを各2グループ毎に担当）し、各グループにおいて作成した対象プロジェクトに対する評価計画を発表した。各グループはそれぞれ独自の角度から事例プロジェクトの分析等を行い、内容自体充実したものであったと同時に創意工夫がなされたプレゼンテーションが行われ、楽しく、実り豊かな全体会となった。

<分科会報告>

- ・参加者による分科会での議論の内容・結論（事例プロジェクトを対象にした評価計画）
- ・他参加者との質疑応答・発表内容の共有

2. ファシリテーター及び対象プロジェクト一覧

分科会	ファシリテーター	職名・所属	対象プロジェクト
グループA	小嶋 雅彦	JICA 青年海外協力隊事務局 管理課長代理	A
グループB	枝木 美香	アーユス＝仏教国際ネット ワーク	B
グループC	長畑 誠	シャプラニール＝市民による 海外協力の会 海外活動グループ課長	A
グループD	竹内 康人	JICA 農業開発協力部 農業技術協力課長代理	B

（*プロジェクト名）

A：JICA 農業開発協力部農業技術協力課「フィリピン・ボホール総合農業振興計画」

B：ヒマラヤ保全協会「ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト」

分科会報告（グループA）

JICA 青年海外協力隊事務局 管理課長代理

小嶋 雅彦

担当事例：

JICA 農業開発協力部農業技術協力課「フィリピン・ボホール総合農業振興計画」

（1）分科会での議論の内容・結論

（イ）導入（問題意識の共有化）

最初に簡単な自己紹介を行い、各々の問題意識等について分科会内で共有化した。

（ロ）議論の枠組み設定（誰のための評価か）

「評価の5W1H」に沿って議論が進められたが、まず「誰のために評価するのか」について議論沸騰。プロジェクトのステークホルダーを整理する中で、敢えて日本側代表でマクロな存在の「日本の納税者」とフィリピン側代表でミクロな存在の「ボホールの小作農」の二つの「誰のために」を設定した。この両対極とも言える存在を設定することにより、自らがその当事者（小作農なり納税者の代表）になりきりやすく、ロールプレイしながら今後の議論を行うこととした。

（ハ）展開（評価マトリックスの作成）

その後二つのグループに分かれて、「誰が」「何を」「どのように何で測るか」「どのようにフィードバックするか」の各々についてブレインストーミングを行い、意見を集約した。この過程では、本プロジェクトを離れて、議論が現実性、具体性の欠ける一般論に流れたり、「何を」と「どのように測るのか」が混乱したりした段階もあったが、最終的には「評価5項目」に立ち返って議論が展開していった。

また、二つのグループでおおよそのマトリックスができあがった段階で、相互で発表しあい、お互いに第三者の視点で疑問や助言を出して軌道修正した点は興味深い試みだった。特にその過程で「納税者」の視点で評価するアプローチにおいても、「小作農」の幸福度が日本国民にとって一つの大きな評価項目であるという点が浮かび上がったのは特筆に値する。

（ニ）プレゼンテーション方法の検討

ロールプレーしながら議論してきたこともあり、発表の方法も自然と「小劇」方式で、「納税者」や「小作人」の声を核にプレゼンテーションすることになった。劇のシナリオを作成しながら、演技の練習をし、同時にOHPも作成していった。

(2) ファシリテーターとしての総括

(イ) ファシリテーターとして留意したこと

以下の点に留意した。

- ・ファシリテーターが議論の内容（中身）を誘導することなく、参加者主導になるよう配慮。
- ・評価の視点や評価5項目等の必須のポイントについては、適宜ファシリテーターから助言。
- ・議論の呼び水となるように、ブレインストーミングの場面では1アイデアだけファシリテーターから提出した。

(ロ) 反省及び教訓

- ・導入段階から参加者主導を意識しすぎたせい、最初は参加者からの発言が少なく、参加者主導の主体的性が発揮されるまで時間がかかった。議論の進め方、役割分担等についてはファシリテーターが、ある程度時間をとってもしっかり説明する必要がある。
- ・プレゼンテーション（小劇）の準備に多くの時間がかかり深夜遅くまでの作業となってしまった。効果的な時間配分を行う必要がある。

以上

誰のために	誰が	何を	どのように何で測るのか	フィードバック
<p>納税者</p> <p>〔納税者に対して説明責任を課す〕</p>	<p>〔会計検査院 監査法人 (便覧) 他国政府、国際機関 職業コンサルタント 類いの体験を持つ 他のNGO〕</p>	<p>会計処理</p> <p>コストパフォーマンス</p> <p>〔収量・所得 作付面積 社会的コスト 持続性 自立発展性 水利組合の組織度〕</p> <p>幸福度</p>	<p>〔領収書 会計帳簿〕</p> <p>〔農業統計局情報 州開発事務所情報 統計〕</p> <p>〔ミーティング出席率 水利費徴収率〕</p> <p>体験ツアー</p>	<p>・報告書</p> <p>・ODAタウンミーティング</p> <p>・インターネット (HP)</p> <p>・予算見直し</p> <p>税制改革</p>

誰のために (何のために)	誰が	何を	どのように何で測るのか	フィードバック
小作	小作人の代表者 フィリピン大の先生	直接お金をくれた方がよかったのでは？ 営農指導の効果	灌漑の満足度 〔平均単収 地代 野菜を作る小作家数 農業時間〕	・小作人による小作人の寸劇
〔小作人の オーナーシップを育てる	C/P	水管理の適性をはかる 「金は適切に使われたか」効率性 小作人にとって何の益があったのか (インパクト) プロセスの妥当性	〔小作の水組合幹部になった数 小作の水管理組合へ加入率 必要とする農機具があったか 農作業の負担は軽減したか〕 〔出稼ぎが減ったか 食事の回数 生活が楽になったか〕 〔小作人がモニタリングを受けらるのに面倒と 思うか〕	・日、英、ビザヤ語の報告書 ・7-7-7のビデオ ・小作人による小作人へのビデオ上映

① そもそもなぜ評価するのか？

- ・ 納税者への報告
- ・ 類似プロジェクトへの教訓
- ・ プロジェクトの見直し
- ・ フィリピン側のownership、能力の向上

② 誰のために

納税者

JICA、外務省、農水省

フィリピンのC/P

水利組合員

州政府、フィリピン政府

普及員

小作農民

地主

③	誰が	何を	どのように何で測るか
会計処理	会計検査院	会計処理	領収書
	監査法人		会計帳簿

④	誰が	何を	どのように何で測るか
便益の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他国政府 ・ 国際機関 ・ 職業コンサルタント ・ 類似の事業をもつ他のNGO 	<ul style="list-style-type: none"> コストパフォーマンス 収量・所得 作付面積 社会的コスト 持続性・ 自立発展性 水利組合の組織整備 農家の幸福度 	<ul style="list-style-type: none"> 農業統計局情報 州開発事務所情報 統計 ミーティング出席率 個別調査 (アンケート、インタビュー)

国 益

- ・日本人のイメージ
- ・専門家の能力向上
- ・二国間関係の向上

⑤ 目に見えない大切なもの

誰が	何を	どのように何で測るか
民間モニター (おやじ)	幸福度	体験ツアー

⑥ フィードバック

報告書

ODAタウンミーティング

インターネットでの公開

予算見直し

→ 税制改革

⑦ (一方、小作による小作のための)

誰のために → 小作

何のために → 小作人のオーナーシップを育て、能力向上

誰が → { 小作人の代表者
フィリピン大学の先生
C/P

どのように → ワークショップ (参加型)

何を	何で測るか
「直接お金をくれた方がよかったのでは？」 (プロジェクトの必要性) relevance	灌漑に満足しているか。 (参加型ワークショップ)

⑨ 何を？ どのように、何によって

「営農指導の効果」 →

- ・ 平均単収
- ・ 地代
- ・ 野菜を作る小作家数
- ・ 小作の農作業にかかる時間

「水管理の適性をはかる」
(有効性 effectiveness) →

- ・ 小作の水組合の幹部になった人の数
- ・ 組合費徴収率
- ・ 小作の水組合の組合長になった人の数
- ・ 水管理組合への小作の加入率
- ・ 訓練を受けた普及員の離職率
- ・ 小作の研修参加回数

⑩ 何を？ どのように？

「金は適切に使われたか」
効率性 efficiency

- ・ 必要とする農機具があったか
- ・ 普及員の活動によって小作が JICA の選定した品種を選んだか
- ・ 農作業の負担が機材や研修で学んだことによって楽になったか

⑪ 何を？ どのように？

「小作人にとって
何の益があったか？」

インパクト、影響
(impact)

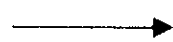
- ・ 出稼ぎが減ったか
- ・ 食事の回数 (1日)
- ・ 生活が楽になった気がするか？
- ・ 収入は増えたか減ったか
- ・ 子供は学校に行くようになったか？ (就学率)
- ・ 下痢の回数
- ・ かかった病気の種類
- ・ (遠い町の) 病院に行った回数
- ・ 女性の家事以外の労働が増えたか
- ・ 肉を食べる回数 (1月)
- ・ 祭りのレチョン (豚の丸焼き) の頭数

⑫

何を？

どうやって？

「プロジェクトは
誰のため？」



小作人はモニタリングの為の訪問
を受けるのに面倒と思ったか

プロセスの妥当性

⑬ フィードバック（の方法）

- ・小作人による小作人への寸劇
- ・日、英、タガログ、ビザヤ語の報告書
- ・ワークショップのビデオ制作
- ・小作人による小作人へのビデオ上映会

⑭ 配役

ナレーター：室谷龍太郎（JICA国総研）
（納税者組）

納税者：吉田憲（JICA中南米部）

会計検査官：吉川剛（CCWA）

コンサルタント

近所のおやじ

リポーター歌舞伎町：佐伯美苗（AMDA）

（小作人組）

小作人：帖佐理子（じゃっど）

長老：岡村美由規（JICA中南米部）

リポーター・ボホール島

タギビランの市場：西井和裕（フィリピン情報センターナゴヤ）

⑮ OHP作成：山形律子（JICAアジア1部）

脚本：みんな

演出・方言指導：吉田憲、帖佐理子

大道具・小道具：鈴木真里（JANIC）、米山敏裕

+寛容な世話人

監督：小嶋雅彦（JICA JOCV事務局）

分科会報告（グループ B）

アーユス＝仏教国際ネットワーク

枝木 美香

担当事例：

ヒマラヤ保全協会「ネパール・アンナプルナ総合環境保全プロジェクト」

（1）分科会での議論と内容・結論

MAC2 プロジェクトは、ヒマラヤ山脈の麓、ネパール王国ミャグディ郡にて 20 年以上 続いているものである。会の名前が表すように環境保全、森林保全が中心の活動と思われる一方、実際には保健衛生であり、教育支援であり、収入向上であったりと、多岐に渡る活動が展開されている。一見、横のつながりがなさそうなこれらの活動を、どのように理解するべきかをまず検討した。つまり、プログラムの中の一つのプロジェクトと見なすか、もしくはこれら全てが一つのプロジェクトを形成しているのか、とプロジェクトの構成についての話し合いを行った。

また、活動が始まったきっかけが、会長の川喜多氏の思いが強いという点にも参加者はひっきりを見させていた。住民のニーズ調査があったとか、現地の NGO から依頼があったとかいう訳ではなく、会長の思いと住民とのつながりから生まれてきた事業ではないかと。ということであれば、プロジェクトをきちんとしたフレーム（例えば PDM）に落とし込むこと自体が難しい作業になる。参加者は、NGO らしく住民とのふれあいの中から必要に応じて生まれたきた活動によって成り立っているプロジェクトと理解し、まずは配布資料を元に活動を列挙し、並べてみた。

並べていく作業の中で、対象者、活動の主体、IHC の関わりなども一緒に整理していった。すると、自ずと、一見まとまりがなかったいくつかの活動の間にも関連性が見え始め、7 つある活動を大きく 3 つのグループに分類した。その結果、このプロジェクトは、中心の柱として環境や伝統の保全活動があり、その保全活動を続けていくための補助柱として、住民の生活向上と経済的自立支援に焦点を当てた活動があるという理解で合意した。

しかし、プロジェクトの構成は概ね理解しても、このプロジェクトは誰のためのプロジェクトで、NGO の役割は何か、そして何を目標に活動しているのかというプロジェクトの基本となるところで議論が重ねられた。川喜多会長の思いが「誰のため」のプロジェクトになっているのか、NGO はそこでいつまで何をしたいのか、そして何を達成したいのか、もしくは達成したいことはあるのだろうかなどの点に関して議論した。自立を促進しているようで依存を生んでいるのではないか、などという意見も出たが、その疑問が反省点となり、評価する点が絞ることにつながった。結果として、住民の主体性を大切にしている、持続した活動となることを重視しているプロジェクトであると合意したので、次に評価計画を立てるにも視点が定まりやすくなった。

上記のように活動を理解したので、評価も住民のため、そしてそれを支えている NGO のためであり、目標達成のための今後の方針決定を行うことを目標に評価を行うことに合意。そして、「村人の主体性」「持続性」「活動の妥当性」に焦点が当てられて、計画された。ここからは、小グループに分かれての作業が多く時間も限られてきたので、議論を重ねるよりまとめる作業に力が入れた。「何を評価するか」という項目に「達成度」が挙げられなかったが、これは各項目に織り込まれているとのこと。全体の結果としては、配付資料となった表を参照していただきたい。

全体としては、プロジェクトの概要を理解し合意するのに時間が取られ、かつ議論も盛んに行われた。しかし、一旦プロジェクト概要が決まると、評価を計画する作業は比較的スムーズに進んだと思われる。また、NGO 側も JICA 側も大きく対立することは全くなく、如何にこの事業を NGO の視点から理解するかに務めていた。

(2) ファシリテーターとしての総括

参加者が非常に積極的であったのが心強かった。私が担当したグループは NGO の事例を扱ったが、JICA からの参加者が NGO の特徴を素早く理解し、長所を伸ばす形でプロジェクトを理解しかつ評価計画を立てたことが、正直なところ新鮮であり驚きであった。この事例は、いわゆる計画通りに事を進めてきた事業ではなく、住民のニーズに対応しながら作られてきているため、PDM に慣れている JICA の人々には不完全な印象を与えるかとも懸念したが、まっ

たくの取り越し苦労であった。

この研修を通して、JICA 事業が持つ計画性を NGO 職員が学び、NGO 事業の特徴である住民のニーズへの対応性や計画の柔軟性を JICA 職員が学ぶのは、お互いの活動の良い点を伸ばし、まだ未熟な点を改善していく上でよい刺激であり経験になったと思う。また、参加者自身、まさにそういった点を学べたのではないだろうか。

(1) の終わりにも書いたが、プロジェクトの理解が深まれば、自ずと評価計画は出来てきた。もちろん、限られた情報を駆使しての作業なので、想像が及ばないところもあったと思うが、評価計画にはプロジェクトの理解がまず大切だと痛感した。また見方を変えれば、プロジェクトを理解すること自体がプロジェクトの振り返り作業の一環であるので、それ自体が評価計画プロセスの第一歩なのであろう。その際に、欠点だけを取り上げるのではなく、生かされるべき点、効果を上げている点に着目することが実施側にとっても受益者側にとってもプラスの作用を及ぼし、今後活動を改善していくことにつながると思う。この度の研修の作業でも、参加者が事例の良い点を引き伸ばすような理解をしたので、プロジェクト自体が呼吸をしているかのごとく生きた物として私たちのものとなった気がする。参加者全員、ヒマラヤ保全協会のプロジェクトに、多大なる愛着を持って研修を終了していたようだ。

以上

ヒマラヤ保全協会 (MAC2プロジェクト)

評価は、

誰のため? : 地域住民IHCN、IHCJのため

何のために? : 村人主体の活動に向けて今後の活動方針・内容を決めるため

評価計画作成に至るまでの議論のポイント

- ① IHCのヒマラヤに対する (川喜田会長)

本能的な愛情・理念

- ② さまざまな活動の整理と

3つの柱へのグルーピング

- ③ 3つの柱となる活動をまとめる目標の設定

「村人主体の持続可能な村作りを行う」

- ④ 目標を評価する

「村人の主体性」「持続性」「妥当性」という視点の設定

- ① プロジェクトに対する理解

- ・長いつきあい (古い友人)
- ・村の人々の主体性
- ・次から次へとうまれた活動
- ・依存と自立

村人が主体の持続可能な村づくりを行う

いつ	第2フェーズの終了時		
何のため	村人主体の活動に向けて今後の活動方針・内容を決めるため		
誰のため	地域住民 IHCN IHCJ		
何を	人材・組織面での持続性	経済社会情勢的持続性	妥当性
	村人のイニシアティブ 村人のプログラムに対するオーナーシップ 参加/意志決定のプロセス 村人/村人代表の村造りの考え方	現行の各種委員会組織システムで良いか 周りの理解 経験の蓄積 活動実施に最低限必要な資金 委員でない村人がプロジェクトに関わりたいか 各種委員会が村人にとって役立つと認識されているか 委員会の回数 委員会の出席率（リーダー） 自学システムの構築（勉強会など）	目的に対して活動のプロセス 活動内容 ニーズに対して投入と結果のバランス 期間設定 プロジェクト全体の実施体制 プロジェクト全体の運営方法 個々の活動の実施体制 個々の活動の運営方法
誰が	IHC/村人 第三者のファシリテーター トレーナー リサーチチーム参加者受益者	IHCJの評価メンバーと IHCNのスタッフ	IHCJ、IHCN、村人 第三者（学者、他NGO、ドナー、理事）
誰に対して	村人 住民組織（委員、リーダー）	村人 村の委員/リーダー	スタッフ、IHCJ、IHCN 村人 老若男女 受益者 参加者 グループ単位（委員会） 各委員会等 行政、学校、病院
どのようにして	PRAによる調査 ソーシオグラム フォーカスグループディスカッション 村の委員会へのインタビュー 村人自身が村の夢を絵で描く 各住民組織の会合に参加観察	村の委員及び周囲へのインタビュー 村人との委員の働きぶりに対するフォーカスグループディスカッション	フォーカスグループディスカッション インタビュー 全体討議
フィードバック	評価項目の共通基盤は村人の主体性 評価作業中は常に村人の主体性を重視 現状の自己認識の共有 村人が評価に関わることの学習効果 全体討議で今後の方針を決める		合意形成 IHCJ、IHCNの存続 村人住民組織の評価
吸収すべき方法	外部条件の変化	事前準備の実施（外部条件のモニタリング）	

村人が主体の持続可能な村づくりを行う

いつ	第2フェーズの終了時		
何のため	村人主体の活動に向けて今後の活動方針・内容を決めるため		
誰のため	地域住民 IHCN IHCJ		
何を	人材・組織面での持続性	経済社会情勢的持続性	妥当性
	村人のイニシアティブ 村人のプログラムに対するオーナーシップ 参加/意志決定のプロセス 村人/村人代表の村造りの考え方	現行の各種委員会組織システムで良いか 周りの理解 経験の蓄積 活動実施に最低限必要な資金 委員でない村人がプロジェクトに関わりたいか 各種委員会が村人にとって役立つと認識されているか 委員会の回数 委員会の出席率（リーダー） 自学システムの構築（勉強会など）	目的に対して活動のプロセス 活動内容 ニーズに対して投入と結果のバランス 期間設定 プロジェクト全体の実施体制 プロジェクト全体の運営方法 個々の活動の実施体制 個々の活動の運営方法
誰が	IHC/村人 第三者のファシリテーター トレーナー リサーチチーム参加者受益者	IHCJの評価メンバーと IHCNのスタッフ	IHCJ、IHCN、村人 第三者（学者、他NGO、ドナー、理事）
誰に対して	村人 住民組織（委員、リーダー）	村人 村の委員/リーダー	スタッフ、IHCJ、IHCN 村人 老若男女 受益者 参加者 グループ単位（委員会） 各委員会等 行政、学校、病院
どのようにして	PRAによる調査 ソーシオグラム フォーカスグループディスカッション 村の委員会へのインタビュー 村人自身が村の夢を絵で描く 各住民組織の会合に参加観察	村の委員及び周囲へのインタビュー 村人との委員の働きぶりに対するフォーカスグループディスカッション	フォーカスグループディスカッション インタビュー 全体討議
フィードバック	評価項目の共通基盤は村人の主体性 評価作業中は常に村人の主体性を重視 現状の自己認識の共有 村人が評価に関わることの学習効果 全体討議で今後の方針を決める		合意形成 IHCJ,IHCNの存続 村人住民組織の評価
吸収すべき方法	外部条件の変化	事前準備の実施（外部条件のモニタリング）	

分科会報告 (グループ C)

シャプラニール=市民による海外協力の会
長畑 誠

担当事例：

JICA 農業開発協力部農業技術協力課「フィリピンボホール総合農業振興計画」

1. 分科会の内容

(1) 対象プロジェクトについての整理

① PDM (Project Design Matrix)の確認

——プロジェクトの上位目標・プロジェクト目標・成果・活動内容について、午前中の説明や資料をもとに整理・再確認

② プロジェクトの Stakeholder の役割の整理

——プロジェクトの全ての関係者（実施側・受益者側双方）を列挙し、プロジェクトの各活動ごとに、それぞれがどのような役割を担ったかを確認。特に意思決定に誰がどのように参加していたかに留意。その過程で、農民は常に「受け手」の立場であり、プロジェクトの殆どは APC（農業振興センター）内部で決められていることが明らかに。

③ プロジェクト関係者自身による自己評価の確認

——プロジェクト関係者は、このプロジェクトについて、どのような効果・成果があり、どんな問題点・課題があると認識していたかを確認

(2) 対象プロジェクトについての批判的な検討

プロジェクトのデザインそのものの整合性・妥当性を考えるため、PDM の各段階（活動・成果・目標）について批判的に検証した。話し合いを通じて、例えば次のような疑問が提示された。

【活動について】

- ・ 普及員や中核農民への研修だけで営農能力の強化が可能なのか。
- ・ 農業振興制度の改善の指標は何なのか。
- ・ 水利組合の活性化は単に運営能力をつけるだけで実現できるのか。

【成果について】

- ・ 「地域適合型営農体系」とは何なのか。
- ・ 農業生産性向上を稲の収量のみで定義することは妥当か。

- ・ 水利組合の効率的な管理はどう測るのか。

【目標について】

- ・ マーケットが安定的に存在しないと収入向上にはつながらないのでは。
- ・ 農民の収入向上という場合、誰のことを指すのか。（最も貧しい人は？）
- ・ ボホール全体に波及させるために、プロジェクト地の選定は妥当だったか。
- ・ 灌漑整備が前提となった計画のようだが、それは妥当だったのか。
- ・ 地域総合開発計画自体が古くなっているようだが、妥当だったのか。

(3) 評価計画の作成

① プロジェクトを2つの視点から見る

- a) 問題を外部の専門家が主導して解決するプロジェクト（JICA・専門家主導の従来型プロジェクト）
- b) 住民自身の問題解決能力を育成するプロジェクト（住民主体の参加型プロジェクト）

② 双方の視点それぞれに立った評価計画を作成

- a) JICA の評価ガイドラインを参考に、評価5項目に沿った評価計画を策定
——(2)で行った PDM の批判的検証をもとに、プロジェクトの弱点や妥当性・持続性について特に深く調べるための質問項目を考える。
- b) 農民自身がこのプロジェクトを評価する計画を策定
——最終的な受益者である農民自身が、プロジェクトの各活動内容について評価するという想定で、「誰に対して何をどのように調べるか」を列挙して整理してみた。

(4) 発表の準備

グループ a)、b)それぞれに発表の準備。特に b)は寸劇的な発表を目論んだ。

2. ファシリテーターによる総括

(1) 評価のあり方について

この分科会の対象プロジェクトは JICA の事業であり、PDM をはじめとして、プロジェクトのデザインに関する資料が十分存在していたため、プロジェクトの内容把握は容易であった。しかし、実際に PDM を批判的に検証してみたところ、仮説に飛躍があったり、目標に対する活動内容が不十分であったり、成果を測る指標が不明確である、といった点が明らかになった。そこで、PDM に沿って 5 項目評価を行う際には、こうしたプロジェクトデザイン自体の不備な点をしっかり見ていくことが、プロジェクトの妥当性や持続性を検証する上で欠かせない、ということが分科会を通じて明らかになったと思う。

またもう一つ重要なのは、今回の対象プロジェクトは「住民自身の問題解決能力をつける」指向が少ない、という点である。このプロジェクトは外部の専門家の導入と「灌漑設備」のようなインフラ整備を組み合わせたものであり、農民が主体的に自分たちの問題を解決するプロセスを大事にしているものではない。しかし、プロジェクトが終了した後にプロジェクトの成果が持続していくためには、農民自身が主体的に動くようになっていなくてはならない。そこで、この分科会では敢えて「農民が主体となってプロジェクトを評価する」とどうなるか、という想定で計画を立ててみた。プロジェクトの性格が違うため、こうした「受益者主体の参加型評価」をこのプロジェクトに当てはめるには若干無理があったが、演習としては意味があったのではないかと思う。

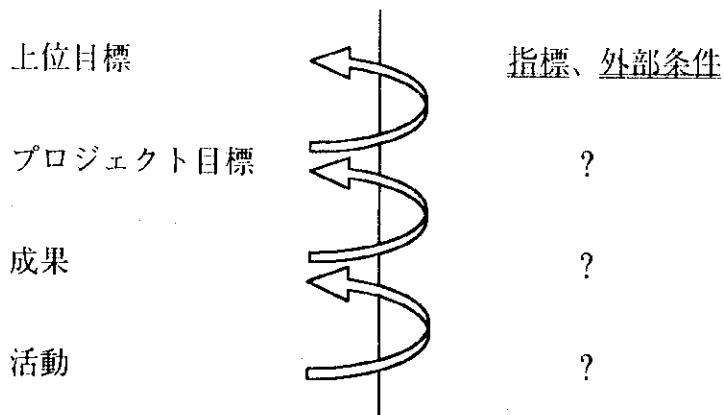
(2) ファシリテーターのコメント

PDM を批判的に検証したり、あえて「農民主体の評価」を考えてみたり、ずいぶん冒険的な課題に挑戦してもらったが、参加者の皆さんは最初から最後まで積極的に、まさに「主体的」に参加してくれた。議論も活発で、さまざまな視点から「プロジェクトのあり方」や「評価」について考えることができたと思う。今後は、それぞれの場で、「プロジェクトはどうあるべきか」「住民自身の問題解決能力の強化を促進するプロジェクトとは何か」について常に留意しながら、評価のあり方まで見据えた活動を続けていただければ幸いである。

	グループA	グループB
何のため？	事業の見直し	農民自身の変化の確認
誰のため？	農民、JICA、日本国民	農民
誰が？	JICA	農民
手法	PDM	農民のアイデア

2つのプロジェクト

- *問題を（外から）解決するプロジェクト
- *地域の人の問題解決能力をつけるプロジェクト



- なぜAPCなのか？
- なぜ米4t/haなのか？
- 「地域適合型営農体系」とは？
- 組織は続くのか？ 能力とやる気

+ α の視点

「柔軟性」

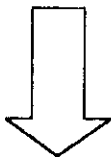
- 農民から学んだか？
- 誰がどんな問題にどう対応したか？

フィードバック

- 農民の今後
- 次への教訓
- 国民への報告（何を知りたいか？）

前提条件

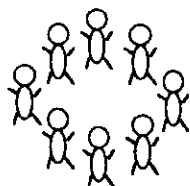
- ・このプロジェクトは、農民の要望から生まれたものではない。
- ・このプロジェクトは、農民の問題解決能力を向上させることにある。



- ・自分達は農民という設定で、農民自身がプロジェクトの評価を行う。

?

APC



何を調べるか

- ・営農技術の習得度
- ・水利組合の意義
- ・普及員との関係
- ・関係者との関係
- ・自分自身の変化
- ・経済（家計）の変化
- ・社会の変化
- ・問題解決能力
- ・オーナーシップ
- ・今後・・・

どう調べるか

日々の記録、話し合い、質問票、
参与観察、PRA（Wealth ランキング他、タイムライン...）、
フォーカス・グループ・ディスカッション、インタビュー、テストetc.

フィードバックのあり方

- ・ 評価結果の分析内容を共有
 - = コンセンサスの確認
 - (農民間、JICAと現地関係者と)
- ・ 次の活動計画作成
 - 何をするのか
 - 何のために
 - 誰と
 - 波及を目指す (まだ参加していない人)
 - (他の地域)
- ・ 問題解決能力の向上のプロセス
 - 知識・経験・ノウハウの蓄積と分析
 - 活性化
 - 能力アップ